

---

# 魔法のシルシ

駄天使

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法のシルシ

### 【Nコード】

N5294U

### 【作者名】

駄天使

### 【あらすじ】

ここは魔法が存在する世界、そんな中に生きる少年、シル、普通の生活を送る彼だが、シルは魔法を使うことが出来ない、ある日学校の魔法の授業中に黒のローブに身を包んだ魔導師と、一人の少女が・・・謎の少女は自分のみを狙われているといい、シルに助けを求める、彼女の力になるため、自分自身が強くなるため、シルは同級生、ラウル、レイ、と共に旅に出ることを決意する。

## 1 - 1 - シル - (前書き)

どうも、駄天使です。

小説家になろうへの投稿は初めてです。

以前はFC2さんを利用させていただいていましたが、友達の誘いもあり、こちらで書くことに。

駄文を見せることになると思いますが、お付き合い頂ければ光栄です。

いいか、シル、これは魔法の印だ、これがお前をきつと守ってくれる、絶対に手放すんじゃないぞ？

うん、父さん . . .

「シル！起きろ！！」  
広い教室に教師の大声が不意に響いた。

「はい！」  
シルと呼ばれた生徒はよだれを拭いて顔を起こす。周りからクスクスと小さな笑い声が聞こえてくる。

再び教師の催眠術のような分厚い教科書の朗読が始まった。まだ眠い目を擦りながら先ほどまで見ていた夢を思い返す。

(懐かしい夢だったなあ . . .)

程なくして授業の終わりを知らせる鐘が鳴った。教師は読んでいた教科書をパタリと閉じ、号令を掛けた。生徒はばらばらとそれぞれのことを始めていた。

「おーい、シル！」  
声を掛けてきたのはシルと同じクラスのラウルだ、魔法や勉強がまったくできないシルとは対照的に、魔法、勉強、さらに運動にも長けている。ルックスも人並み以上なのでいるんな人から人気の高い生徒だ。そんなシルとは似ても似つかない生徒とよくつるんでいるのは、家が近所だったことや、幼いころから今まで何かの縁か、学校やクラスが離れることが無かったのが理由である。もう一つ、大

きな理由が、ラウルが頼りないシルに世話を焼いているということだ、シルはあまりいい気分ではないようだが・・・」  
「次の授業はグラウンドで魔法の練習だつてさ」

ラウルは男子としては細く、色白な指をグラウンドのほうに向けた。その情報に対してシルは不機嫌そうな顔で応えた。

「そうかい、落ちこぼれの俺には関係ないなあ」  
「やれやれ、といった感じでラウルは掌を上に向けた。

「でも、そろそろ魔法の一つ二つ使えないとまずいんじゃないか？」  
立てられた二本の指をシルが掴み関節が曲がるのとは逆の方向に曲げようとする。

「必殺魔法、ゆびぼつきん」

なんだよそれ、と苦笑いしながらもう片方の手でシルの手を解きながら運動場行こう、と誘って手を引いていく。

グラウンドに二人が出るとすでに大体の生徒が揃っていた。

「やる気でねーわ、やつぱ」

シルが猫背になりながら大きなため息をつく横でラウルが「まあそ  
ういわず」とフォローを入れる

「これが終つたら昼ごはんだぞ？」

子供のやる気を出させるような言葉にシルはムツとしながらもし  
しぶ授業を受ける姿勢を見せた。

「わかったわかった、魔法の一つでも覚えとけつて言うお前の気持  
ちはな、でも出来ないもんはできないんだよ、こればかりはどう  
しようもないね」

嫌味を言葉いっぱいに入れてシルは反論した。これにはラウルもお  
手上げらしい。授業はしっかり受けるよ、とラウルは釘をさす。へ  
いへいと適当な返事をするシルを心配そうに見送ると授業の開始を

つげる鐘が鳴り響いた。

「さあ！魔法の授業だ！お前たち、準備はいいな？」

あごひげを蓄えた茶髪の教師が大きな声を出す。茶色いぼさぼさの髪、ごつごつした顔、そして茶色を基調としたその服装、とても魔法を使えるとは思えない、炭鉱などでせつせとつるはしを振っているほうが断然しっくり来る。

そんな先生の指示に従って生徒達はグラウンドに丸い円を書き始めた。この世界での魔法を使うにはいくつかの手順を踏まなければならない。まず、この世界はもう一つの世界、『幻界』と隣り合わせに存在している。幻界ではあらゆる事象が起き、この世界では想像もつかないような生き物が存在している。その幻界とこっちの世界を「魔方陣」というゲートによって一時的に繋げ、力を利用するのである。魔方陣はまず、円を基準に作られる。丸というのは特別な図形で魔法を使うのに失敗しにくくなるとか、そういうことらしい。魔方陣は複雑化すればするほどその許容量を増す。しかし実際の戦闘でそんなに悠長に魔方陣を書いている暇はまずない、よって、戦闘では簡略な魔方陣のほうが重宝される場合が多い。陣を描いたらそれに伴った詠唱を行う、陣により通り道を作り、詠唱で呼び出すのだ。

「よし、じゃあ炎魔法の陣を書いてみる」

教師の声にみなが反応し10メートルほど向こうにある的に向かい詠唱を行う。

『我が名に基き、異界の門を開く』

生徒達の声に応えるように、地面の魔方陣が光となって浮かび上がり、90度反転する。

単純な炎魔法、ただ一つの火球を呼び出すのに唱える詠唱はごくわずかでいい、大体の生徒が的に命中、もしくは近いところまで行っている。しかし、

「シル・・・またお前か・・・」

何度も聞くその言葉に「はあ」というため息がおまけでついてきた。

「なあ、どうしてお前はこの程度の魔法も使えんのだ・・・それではこの国を守ることなぞ到底できんぞ」

最近、この国では争いが増えてい、というのも、この国、「ラングドウシャ」は広大な土地を所持している。しかも大きな運河が数本流れており、気候にも恵まれている。これほど立地に恵まれた国はそうそうないだろう。しかもこの国の領主は平和主義者、争いの発端はいつも他所の国からばかりである。領主は仕方なく自衛のためだけと法に定め、軍を設立した。

「でもねえ、先生」

目上の人に話しかけているとは到底思えない口調でシルは話し始める。

「出来ないことはできなっすよお、誰にでもあると思うんすよね、飛べって言われたって不可能だし、死人を蘇らせるとか無理でしょう？それが俺の場合たまたま魔法だったわけで・・・」

「お前の長々しい弁解、もとい、言い訳は聞かん、そんな事言っている暇があるのならさっさと魔法書を読んで魔法陣の形の一つでも覚えたらどうだ？」

先生はもっさりとしたひげを掻きながらシルの言葉を遮った。

「おれ、最高クラスの魔法陣の形なら全部覚えましたよ！」  
シルが満面の笑みで言う。

「なんのためにだ！？必要なのか！それは！？お前は難しい文字をやたらと書きたがる中学生か！！」

どんな先生の前でも対応が変わらないシルと会話する教師は大体シルのペースに飲まれてしまう。シルという人間は、誰にでも隔てが無く、率直な意見を言う。言い方を変えれば、神経が図太いのだ。

「おやおや、ビスク先生、またシルにおせっかいですか」

クスクスと笑う女性の声、クラスの生徒の視線も声の主に注がれていた。視線の先にはスレンダーという表現がもつとも適切であろう女性が立っていた。黒く長い髪を背中まで下ろし、黒の制服がよりいっそう細身に見せているのかもしれない。

「おお、セシル先生、コイツが相変わらずでねえ」

女性のほうを向きながらシルの手入れはシャンプーぐらいしかしていない髪をぐしゃぐしゃと撫でる、撫でるといには荒々しいが・・・

「おお、セシル姉、相変わらずスレンダーだな！」



シルの言葉にセシルは満面の笑みでシルに歩み寄る、狂気のにじみ出る笑みで・・・

シルは頭に腕を回されがっしりとヘッドロックされている、セシルはシルの耳元で小さく囁く。

「ほおー、『スレンダー』か、それはこの胸のことを言っているのか？ん？」

ぐりぐりと拳でこめかみを刺激しながらの尋問が始まった。

この先生の前でスレンダーという言葉は禁句なのである。

「・・・断崖絶壁・・・」

ボソリ、とシルが呟いたのだが、密着した状態で聞こえないわけが無かった。「ああ!？」と声を荒らげこめかみを押し込む力を強くする。

「あだだだだだ!」

禁句なのである!

そんな和やかな空気を轟音が一瞬にして変化させる。校門をぶち破り、何かが飛んでくる、それは絡み合う教師と生徒に向かっていた。「危ない!」

セシルはシルを抱えたまま横に体を倒した、ぎりぎりのところでとんで来た火球をかわす、火球がすぐ後ろの地面に黒い焼け跡を作ったのを見てからそれがとんで来たほうに眼をやる。

そこには数人の黒いローブをまとった人影があった。

「先生!人が!」

叫んだのはラウルだった、黒いローブの集団の前からこつちに走ってくるもう一つのローブ、負傷しているらしく、肩を押さえながら左足をかばうように走っている。そいつはよろよるとシルの目の前まで来るとか細い声で「たすけて」と囁いて意識を失った、ひざから崩れ落ちそうに鳴るのをシルが体で受け止めた。

「おい!大丈夫か?おい!」

しかし、返事は返ってこない。

「魔導師が・・・どうして・・・」

セシルがシルとすでに意識が無い子供をかばいながら疑問を零す。そんなことは気にも止めず魔導師たちの攻撃は続く。

再び空中に魔法陣が浮かび上がり、火球が向かってくる、シルが眼を逸らした時、轟音とともに火球が弾けとんだ、後ろからビスクが魔法で対抗していた。生徒はラウルが校内に誘導していた。

「大丈夫か？」

ビスクの低い声が響く、「はい」とシルは簡潔な返事を返す。魔導師たちを教師二人に任せて、ぐったりと思い人形のような身体を持ち上げる。

校舎に向かう途中先生が止め損ねた火球が一発、シルの足元に落ちる、足に強烈な熱を感じながらも校舎に歩を進める。

あいつらの狙いはどう考えてもこいつだ、こいつはいつたい・・・？その思考が仇となった。押さえ切れなかった火球がちかづくことにきづかなくなったのだ。

「シル！！！！」

セシルの悲鳴にも似た声がシルの思考を現実に引き戻した。しかし、遅かった。火球はシルの左腕にあたり、二人は爆風で吹き飛ばされ地面に倒れこむ。

炎により焼け破れた服から腕が露出する。シルはすぐにそこからなくなっているものに気が付く、いつも肌身離さずつけていたブレスレットが無くなっている、慌てて近くを見渡すと前方に紐が切れてばらばらになった球がいくつも転がっている。向こうには明らかに今魔法を放ったであろう魔導師の姿。

「あの野郎！」

『ドクン』

怒りと同時にシルの中に何かが湧き上がるのを感じる。なにか、力のようなものが・・・

確信は無いが、シルはこれが魔力だと直感していた。考えるよりも先に手が動く、地面にあっという間に魔法陣が描かれていく、それはより複雑になっていく、陣が描き終わった時、シルは前方の二人

に叫んだ。

「二人ともどいてくれ！！」

二人は振り向いた時、愕然とした。さっきまでまったく魔法を使えなかった生徒がいま、自分達の目の前で最高クラスの魔法を発動しようとしているのだ。

「ここは危ない、離れるんだ！」

ビスクがセシルの手をとり距離を取る、最大級の魔法は二人が離れてからすぐに発動した。

いくつもの雷が束となり、二人の前の空間を切り裂く、超高圧の電流により静電気と耳障りな耳鳴りを生じさせながら真っ直ぐ黒い魔導師たちに向かう。一瞬のうちに数人の魔導師を葬り去った光の束は校門の入り口に巨大なクレーターを作って消えた。

「はぁ・・・はぁ・・・」

先の魔法にほとんどの気力と集中力、そして魔力を使ったシルはその場に膝から倒れた。

気が付くとシルは保健室の白い天井を見ていた。

「あれ・・・なんで俺寝てるんだっけ・・・？」

記憶がいまいちはつきりしない、ばらばらになったブレスレットを見てからの記憶がいまいちになっていた。

はっとして自分の左腕を確かめる。しかし見慣れたブレスレットはついていない。

ふう、と一つ深く息をついてからもう一度寝ようと布団にもぐりこもうとした時、ドアが開く音がした。

「シル、おきたか？」

例の優等生、ラウルの声だった。

「ああ」

と小さな声で答える、「そうか」とラウルもそれに返事をして廊下に居たのだろう先生を呼び入れた。

コツコツと革靴の音をさせながら細身の教師が顔を出した。

「まったく、無茶しやがって」

セシルの表情には明らかな怒りが浮かんでいた。

「まあ、結果オーライでしょう」

シルののんきな返事にセシルの眼光が鋭く光った。

「そんな軽いもんじゃない！初心者があんな上級魔法使いやがって！失敗して大惨事になることだってあるんだ！今回はたまたま上手く発動できたからよかったけどな、暴発でもしてみろ、お前だけじゃなくこの学校全部が木っ端微塵になるところだぞ！！」

「すみません・・・」

シルは後ろめたそうに少し眼を逸らした。

「・・・まあその反応だと反省はしているんだろう、次は気をつけるんだな」

「はい・・・ところで、アイツは？」

「ああ、今この隣で寝ている、そうだ、私たちはこれから授業だがお前はもう少し休んだほうがいい、それで、そいつが目覚めたらシヤワーでも浴びさせてやってくれ、ずいぶん汚れているからな」

「はい」

面倒なことを押し付けられた、とも思ったが、授業に出ることと天井にかけてならこつちの方がまだと開き直すことにした。

二人はすぐに保健室を後にし、眠気が覚めてしまったシルは天井を眺めて過ごすというきわめて退屈で、人生を無駄にしているとしか思えない行動で30分間を過ごした。

そろそろ起き上がりたくなってきたころ、隣のベッドから、「ござござ」という音と小さなうめき声が聞こえてきた。

ベッドから降りて様子を伺う、ベッドに横たわっていたのは金色の髪をした少女だった。

少女はうつすらと目を開けて天井を眺めていた。

視線の先に自分の顔をひよいと出して「目、覚めたか？」と聞く。

少女はびくつと身体を振動させてから「あ、はい」と小さく頷いた。

「いろいろ聞きたいことはあるんだけどさ、まずはシャワー浴びて来いってさ、話はその後だ」

少しの沈黙の後、コクリと少女が頷くのを確認し、浴室のある場所まで案内する。この学校は寮制なので大体の設備は揃っている。

ここな、多分お湯ははられてないからシャワーだけで済ましてくれ、じゃあ俺は着替え借りてくるから。

踵を返して今来たほうに引き返そうとすると、

「あ……いろいろありがとう」

少し頬を染めながらのお礼にシルも若干赤くなる、「お、おう」とそっけない返事でポーカーフェイスを装いながら歩いていく。

数分後、思えばこのとき、もう少し気を使えばあんなことにはならなかったのだが……

「おーい、着替えココに置いてく・・・ぞ？」  
ドアを開けた先にはシャワーを浴び終わったばかりの少女が立っていた。お互いに想わぬ展開に少しの間空気が凍ったように停止する。少したつて状況を把握した両者の顔はリングゴよろしく真っ赤に染まっていた。少女はシルに向かって歩を進め、右手を力いっぱい振りぬいた。  
パーンと軽快な音を上げながらシルは脱衣所から廊下に文字通りはたきだされた。

シルは着替え終わった少女とともに保健室に戻って、なぜか新たに増えた生傷の手当てをしてもらっていた。  
ガーゼを張ってもらっているシルの隣で少女が申し分けなさそうに立っていた。

「あの・・・ごめんなさい、つい気が動転して・・・」

「いや、いいよ、俺のほうこそ配慮ができなかったよ・・・わかるか  
つたな」

「それはシルちゃんが悪いわよお」

二人の謝罪の間に保険の先生こと、リシアが相変わらずのゆっくりした口調で口を挟む。

手当てが終った先生はその豊満な胸の下で腕を組んでいる。薄い茶色の髪は先端が少しカールし、手入れが行き届いているのがよくわかる、そのプロポーションの良さから、怪我をすると喜んで保健室に運ばれてくる男子生徒は多い。

「いや、あれは事故ですよ、わざとではないですから」

「でも見ちゃったんでしょお？」

シルの弁解はあっさりとながされ、すぐに授業の終わりを告げる鐘が鳴り響いた。

すぐにセシルが保健室のドアを開けた。

「さて、色々と聞かせてもらおうか」

「・・・はい、分かりました・・・」

不安そうな面持ちで丸いすに腰をかけた少女は少しうつむきかげんで話し始めた。

「えっと、まずお礼をさせて下さい、助けてくれてありがとうございます。」「いました」

ぺこりと小さく首を折った。

お礼の後には質問攻めが来ることは想像に難くなかった。案の定それは現実になっている。

「お前の名前は？なんていうんだ？」

「アイリです、生まれは西のカルア地域です。」「

「というと、農作の地だね、私も行ったことが・・・はあ！？カルア地域！？」

セシルは突然声を荒らげた「どうかしたのか？」というシルの質問。

「カルアって・・・馬でも半年はかかるわよ？」

「ええ！？じゃあ、お前、半年も馬で？」

シルが驚きが収まらないままアイリのほうを向く。

アイリはまだ不安そうに、おそらく言葉を選ぶのに戸惑っているのであろう様子を見せてから、「いえ、家を出たのはもっと前です。

私は二年以上旅を続けています。」「と続けた。その場を短い沈黙が包み込んだ、沈黙を破ったのはセシルだった。

「じゃあ、両親は？」

「二年前に・・・亡くなりました。」「

アイリは少し言葉に間を置いて言った。セシルも「そうか・・・」とだけいい、それ以上この話題については詮索しなかった。

2 - 1 - 少女 - (前書き)

ずいぶん間が空きましたが投稿できました。



「で、あの黒服はなんなんだい？」

セシルは窓を開けてタバコをふかしながら聞く、白い煙がゆっくりと窓の外に流れていくのをシルは眺めていた。

「・・・多分この私が持っている鍵のせいだと思います。」

「カギ？」

アイリ以外の3人の頭上に？マークが浮かぶ。

「なんの鍵なのお？」

相変わらず語尾を少し延ばしながらリシアがもう二人の疑問を代弁した。

「それは・・・分かりません」

「分からない？じゃあどうしてその鍵を・・・？」

当然の疑問、しかし、その疑問が晴れることは無かった。

アイリはうつむき、それぞれの顔を上目遣いで確認してから小さな声で「すいません、言えません」といった。

二人の教師の表情が少し険しくなったのが分かる。

セシルがスパツとタバコの煙を吐きながら言った。

「じゃあ質問を変えるわ、あの黒いローブの集団はなんなんだい？」

「黒の派閥の一派です」

その言葉と同時に終業の鐘が鳴る。鐘が鳴り止んでからシルが口を開いた。

「黒の・・・派閥・・・ってなんだっけ？」

セシルに目で説明を促した、が、声は逆の方から聞こえてきた。

「黒の派閥、主に荒事を専門とし、白の派閥、銀の派閥、朱 あかの派閥と並んで四大勢力と呼ばれていたが、多くの問題行動で今は権力の大部分を剥奪され、収まる場所に収まっている。・・・ですよね、先生」

「ラウルか・・・そんなところまで守備範囲内とはな、恐れ入るな。」

「  
ラウルはシルに向けて、よっと手を上げた。  
ラウルの後ろにもう一つの影が見えた、ラウルの横からひよいと顔を出してきたのは、ラウルやシルと同じクラスのレイ、2人の数少ない女友達であり、幼馴染でもある彼女は、栗色の髪を肩にかかるか掛からないかのところまで下ろし、前髪は左側をピンで留めている。」

「レイも来たのか」

シルが抑揚のない微妙な声を出す。

「なによ」と、自分はお呼びでないというようなシルの反応に少し腹を立てたようにぶくつと頬を膨らました。

「まったく、心配して来てあげたのに」

そういつてリシアとは逆に未発達な胸の前でうでを組んだ、レイは腕組みがしやすそうだな、などと考えていると、セシルが逸れていた話を元に戻した。

「で、なんのはなしだったけ？」

「黒の派閥がどうの・・・ですよ」

ラウルがすかさずフォローを入れる、セシルもそうだったそうだったなんていいながら、再びアイリに向き直った。

そこで、セシルがふとあることに気付いた。

「あ、自己紹介してないな」

皆もその言葉でようやく気付いたらしい、セシルは言葉を続ける。

「あんたも名前も聞いてない人にホイホイ素性話すんじゃないよ。」  
なぜか逆切れのようにいうセシルに、アイリは戸惑いつつ「す、すみません！」と勢いよく謝った。

そして、シルから順に名前だけの簡単な自己紹介をしていった。

なんとも中途半端なタイミングの自己紹介は終了し、話は再び派閥の話に戻っていた。

「なんで奴らが鍵のことを知ってるんだい？」

セシルはタバコの箱から2本目のタバコを取り出し、小さな紙に書いた魔法陣に短い詠唱をとなえてタバコに火をつけながら聞く。

すでに窓の外はオレンジ色に染まりかけていた。

「分かりません・・・ずいぶん昔から伝わっているらしくて、“これ”についての文章か何かが見つかったのかも・・・それが・・・」

「それが？」

シルが言葉の最後の部分を拾い上げる。しかし彼女は「いえ、何でも無いんです。」と少し笑顔を見せた、どんなに鈍感な人でも気付くであろう何かを取りつろうとしてしている笑顔を、だがその場にいる全員がそれ以上に踏み入ることをしなかった。

2、3分ほどだろうか、沈黙が部屋を支配していたのは、気まずいがほかになにを聞けばいいのか、何を聞いたらいけないのか、彼女の心のことをそれぞれが考えた結果、会話がなくなってしまった。そんな沈黙を破ったのはセシルだった。

木で作られた椅子から、立ち上がったセシルは少し身体を伸ばしてから「で、あんたはこれからどうするんだい？」と聞いた。

「・・・それは・・・」

アイリはまたもや下を向く。

「・・・じゃあこの学校にいればいい」

「！」

アイリがセシルの顔を見上げる。

「危険です！おそらく私がここにいることは派閥には分かっています。私一人のためにあなた達を危険に晒すことなんて・・・」

今までに無く激しい口調で言うアイリをセシルが静止した。

「ま、シルもあんたのことが心配そうだしね」

シルは飲んでいた水を噴出しそうになりながら「ばっ、そんなことねーよ！！」と小学生のようなリアクションをしている。

「で……でも……」

と、アイリはまだ迷惑を掛けたくないという気持ちのほうが強いうだ。しかしそんなアイリの態度にセシルが切れた。

「ああ！もうじれったいね！女がじらすのは惚れた男だけで十分だ！！」

とわけのわからないことを叫びながら逆切れしている。

だがその迫力に押されたのかアイリは「はい！お、お願いします！」と言って、勢いよく立ち上がると同時に頭を下げた。

「よし、じゃあそれに決定、あんたは明日から猛この学校の生徒だよ、びしびし教えるから、覚悟しなよ？」

またアイリは「はい！」と勢いのある返事をした。

とりあえずその日はそれで解散となった。

ちなみに、アイリの部屋は余っている寮の部屋にレイが移動し、そこで過ごすということになったようだ。

その夜

「どこ行くの？」

暗闇の中、こそこそと動いていた人影にレイが声を掛けた。

「え……？」

暗闇からは驚きと困惑が混ざった声が帰ってきた。

「“ やっぱり ” ね動くと思ってたよ」

レイが二段になったベッドの上の段から起き上がり、はしごも使わずするりと音も立てずに降りてきた。

「この学校から出て行くつもり？」

わずかな沈黙の後、「やっぱり迷惑はかけられない」という声が返ってきた。

「……で、どうするの？」

暗闇の影はピクリと震えた。

「とりあえず、町の方に行く。派閥に掛け合えばあなた達に迷惑かけずに保護してもらえるかもしれない。」

彼女はそういうとゆっくりとドアノブに手をかける、ガチャと音を立てながら開いた扉の前にはシルを含め3人の影があった。

「ひゃっ!？」

アイリは小さく短い悲鳴を上げた。

怯えた仕草を見せるアイリに、シルはニイと笑い「どこ行くんだ？」と声を掛けた。

少女はこれ以上はなにを言っても無駄と悟ったのか、少し黙ってから頬を少し吊り上げて苦笑いしながら

「ね……寝ます」

といってドアをバタンと閉じておとなしくベッドにもぐりこんだ。

その後、シルも自室のベッドにもぐり考え事にふけっていた。

アイリ・・・カルアから自分の足で来たって言ってたな。馬の足で半年・・・二年以上も奴らから逃げてるってことなのか・・・大変だっただろうな、今日話を聞いて分かった事と言えば、アイリって言う名前と生まれた場所、自分の持つている鍵の所為で追い回されてるって事。あと・・・意外とスタイルがいい・・・そんなことを考えていると寝付けなくなってしまった。

「はぁ・・・少し歩いてこよ」

ドアを開け、真つ暗でよく見えない廊下を歩いているといつも間にかアイリのいる部屋の前まで来ていた。

部屋の前にはアイリの姿があった。

「ちよっ・・・なにやってんだ」

少しあわてながら言うシルのほづを少し見てから、顔を少し傾けつつ彼女は微笑みながら小さな声で言った。

「ちよつと、寝付けなくて・・・もう一人で出て行くのはあきらめたわ」

シルは少し深めの息を一つついてから「そうかよ」と彼女の横で月を眺めることにした。

月はちよつと雲から姿を現したところできれいな満月だった。

「きれいだな」

「うん」

何も考えなかったが言葉が出てきていた。

「あの」

二人の声が重なる、たいしたことでもないのだが、なんとなくそれが気恥ずかしく感じられ、お互いに顔を逸らした。

「・・・どうぞ」

シルがアイリに先を譲った。アイリは小さな声で「ありがとう」と呟いてから、『あの』の続きを話し始めた。

「今日は・・・ありがとう、先生からあなたのおかげだってきいて、

ずっと思おうと思ってたんだけど、いい出せなくて。」

少しうつむいている彼女の表情は月明かりだけではよくわからないが、頬が少し赤く染まっているような気がした。

「なんだ、そんなことか」とシルは空の月を見上げながら応える。

「気にするなよ、あと、俺のことはシルって呼んでくれ」

笑顔でアイリのほうを見ると彼女も「うん、私もアイリでいいよ」と笑っていた。

「えっとさぁ・・・あの、今日は悪かったなあ」

シルが後ろ頭をかきながら謝るが、彼女は何のことに対して謝っているのか分かっていないようで首を少し傾げている。

言い出しにくそうにシルが説明する。

「あの、今日脱衣所で・・・」

そこまで言うと彼女も理解したらしく、月明かりだけでも十分わかるぐらい真っ赤になった。

「あ・・・わ、私、もう寝るね」

「おやすみ」と早口に言うときっさと部屋に入ってしまった。

結果的にシルは一人その場に残され、月明かりに照らされていた。

「はぁ・・・寝よう・・・。」

「と、いうわけで」

教卓に着いたセシルが言うが、何の前触れもなしに、というわけも、  
どういうわけも無い。

「今日からこのアイリがこのクラスで授業を受けるので、みんな仲  
良くやりな、以上!」

・・・と、言うことらしい。

彼女は本当に今日からこの学校で授業を受けることになったようだ。  
挨拶も程々に席についたアイリは今までであったであろう大変なこ  
とを微塵も顔に出さずレイヤラウルに笑いかけていた。

「おはよう」

「あ、おはよう・・・」

シルの挨拶に、目を合わせないようにして応える。頬を若干染めて  
いるあたり、昨晚のことが関係するのだろうか、シルは気にしない、  
いや、気付かないのだ。

今まで、レイヤセシルに『女心が分かっていない』と散々言われて  
きたが、人の性格というのは、そんなに簡単に改善されるものでは  
ないらしい。

「アイリって授業どのくらいまでやってんだ? ずいぶん学校行って  
ないんじゃない?」

とシルが、自分の隣に座っているアイリに聞く。

「う、うん、2年前から行ってないけど、そのときちょうど今のシ  
ルと同じ学年だったし」

彼女の返事に、シルは、「へー、そうなん・・・」と、言葉の途中  
で何かに気付いたらしい。

「え!? もしかして、アイリって年上!?」

「うん、そうだよ、シルが2年間留年してない限りは・・・」

「そ、そうだったのか・・・」



シルは一瞬何かを思い出し出していたが、すぐに意識を現実に引き戻す。「まあなんにせよ同じクラスで良かったな！」  
アイリは白い歯を見せながら無邪気な笑みを浮かべるシルから少し目を逸らし、小さな声で「うん」とだけ囁いた。

「二人ともなんかいい雰囲気なんですけど・・・」  
レイとラウルは少し離れたところで話している、レイは腕を組みながら不満たつぷりに言う。

「うらやましいのか？」  
ラウルが落ち着いた声でレイをからかう、からかわれたレイは顔を真っ赤にし反論する。

「べ、別にそんなんじゃないわよ！」  
「ははは、そうだったな、レイはシルのことなんかどうとも思っていないもんな。」

「え、そういう意味じゃなくて・・・」  
レイは焦るように両手をわたたと振りながら言う。それを見てラウルはなおさらおかしそうに笑う、それを見てレイはムツと頬を膨らまして見せた。  
しかしそれ以上はからかうのをやめておいた、そうしないと、そろそろレイお得意のボディーブローやらなんやらが飛んできて大変そうだ。

「おまえら、賑やかにするのはいいがな、今は授業中だぞ！」  
セシルはシルにだけ白いチョークを叩きつけながら注意する。チョークはシルの額に当たると見事に粉碎した。シルは額を白くしたまま「いつてー！何で俺だけ！？」と不満の声を上げる。しかしそれもセシルの「もう一本ぶち込まれたのかい？」という発言でおとなしくなった。表情は相変わらず不満に満ち満ちた顔をしているが・・・教室はみんなの笑い声で賑やかだった。

そこからは皆静かになり、休み時間を知らせるチャイムが鳴り響いた。号令があり、皆席をはずしてそれぞれの用事を始めた。

あるものは窓際で3、4人でたむろし、会話に花を咲かせている、机に突っ伏して眠っているもの、一人で黙々と読書にふけっているもの、さまざまである。

そんな中この四人は廊下に出て話をしていた。

「どうだ、授業は」

ラウルがアイリの近況をうかがう、シルは窓を開け放し、その窓枠に腰をかけている。アイリとレイは壁に背を預け、ラウルは少し間を空けて立っている。

アイリはいつものごとく遠慮がちに話し始めた。

「うん、みんな良くしてくれるし、授業も大丈夫、着いていけそう。」

「そっか、そりゃ良かった。」

ラウルはいつものイケメンスマイルでにっこりと微笑む、アイリも笑顔でそれに答えた。

その日はそのまま何事も無く平穏な時間が過ぎていくように思われた。

しかし……

ドン

突然の爆音が校舎全体を揺らした。教室の中は突然の事態に、パニック状態になる、教師が生徒を落ち着かせ、他の教師と原因を探る。シルは窓の外に目をやった。木製の校門がほとんど吹き飛んでいるのが目に入った。その置くには昨日と同じ黒いロープに身を包んだ人影がいくつも見られた。

「あいつら・・・」

勢いよく窓を開け放し、二階の教室から飛び降りる、着地したシルは足をばねのようにして、小さく前転し、衝撃をやわれげる。

すぐに校舎からビスクやセシルを含める数名の教師が飛び出してきた。皆、手には武器を持っている。

黒いロープの集団は互いの間隔を広めながら校庭に進入してくる。

シルに向かってセシルが叫んだ。

「シル！お前は中に入ってる！！」

「でも・・・！」

何かしたい、彼女のために何かをしたいというシルの気持ちを汲んだのであろう、「やれやれ」という顔をしながらも、一つ小さくうなずき、敵の集団に向き直った。

すぐに戦闘が始まった。あっという間に複数の魔法陣が展開され、中に浮かび上がった陣からは火球や雷がとびだし、地面を焦がしたり、相殺しあったりしている。シルはそんな中をかくぐって接近戦に持ち込もうとする黒いロープの敵を、剣術の授業用の木刀で殴打している。

お互いに引かず、戦局は大して変わらないまま長引いていた。

シルがほかの教師や相手の位置を確認するために、目を一瞬逸らせた瞬間、再びセシルの声が響いた。

「シル！危ない！！」

何のことが理解できないうちにシルは突き飛ばされていた。こけてすぐに体勢を整え、尻を地面につけたまま振り向く。

シルは、今起こっていることが理解できなかった。

目の前にあったのは・・・腕。その白く、細い腕は彼が良く見慣れたものだった。

すぐそこでは何とか魔法で敵を吹き飛ばしたセシルが右肩を抑えたままうずくまっている。白いシャツは見る見るうちに赤く染まってい

シルは呆然として、震える声を投げ掛ける。

「せ・・・先生・・・それ・・・」

「・・・大丈夫だ・・・」

大丈夫でないのは明らかだった。セシルの顔色がどんどん悪くなっていき、目を開けることもままならなくなっている。

シルの中でさまざまな感情が渦巻いていた。

驚き、悲しみ、恐怖、怒り・・・そして、自分への嫌悪。あらゆる負の感情が湧き上がる。そして

ドクン

また、あの時と同じ感覚がシルの身体を支配する。

シルは、ゆっくりと立ち上がる、セシルは様子がおかしいことを悟り、ほとんど無い体力と意識を振り絞って叫ぶ。

「シル！やめろ！！」

しかし、シルにその声は届かない、薄れていく意識の中でセシルが見たものは、光を放つシルの右肩、シルが右手をゆっくりと肩の高さまで上げる。

するとシルの周りに小ささまざまな大きさの十個ほどの魔法陣が展開される。相手も、教師も一様に驚愕する。

「ばかな！いきなり魔法陣が展開することなど・・・」  
驚きの言葉を発したのは、ビスクだった。

魔法陣からは赤い閃光が放たれ、一瞬で全ての黒いローブを貫いた。彼らは口から血を吐きながら地面に倒れ伏した。

再び魔法陣が光り始め、すでに倒れている相手を襲う、そして、三度目、魔法陣が赤い光を不気味に放ち始める。

「シル！やめろ！！！」

後ろから声を掛けてシルを制止したのはラウルだった。ラウルはシルの光を放つ肩に手を当て、心配そうな顔で見ている。

「ラウ……ル？」

二人の目が合うと、シルの作った魔法陣は姿を消し、力なく膝から崩れ落ちるシルをラウルが受け止める。今回、シルは意識を失ってははいないようだ。シルはハッと我に返ると、後ろで倒れているシルに視線を移す。そこではすでになんんかかの教師が、処置を施し、保健室に運ぼうとしていた。

それを見ながらシルは呆然と呟く。

「俺……またやっちゃまったんだ……」

3 - 2 - 急転 - (後書き)

急すぎるシリアス展開に読者が置いていかれてないかどうかどうか心配です・・・

また来ることになった保健室、しかし、天井を眺めているのはシルではなくセシルだった。彼女はうつすらと目を開け、どこか遠くを眺めるように天井を見ていた。

その隣ではリシアがセシルの肩を治療している、治療と言っても、手術などではない、正確には簡単な手術と『ヒーリング』つまりは個人の回復力を高めて治療するのだ。

当然、失った腕が戻るわけではない、このヒーリングも魔法の一つである。しかし、その力も無限に湧き上がるものでは、もちろん無い。

ヒーリングを使用した者は精神力と体力の両方を失うことになる。

自分の回復力と体力を相手に与えるのがヒーリング、つまり重症患者になればなるほど、その作業はしんどく、過酷なものになる。

リシアの呼吸が深くなり始め、肩が上下するのが目に見えるほどになったとき、セシルが左手を上げてリシアを制止した。

「もういい・・・大丈夫だ・・・」

その声にいつもの気丈さは欠片も無く、弱かった。

その声を傍らで聞くシルの胸が痛む。

「先生・・・ごめんなさい、俺のせいで・・・こんな」

シルは目に涙を浮かべながら、セシルの右肩を見ていた。そこには治療の痕が生々しく残っている。

「あんたの所為じゃないよ」

セシルは優しくなだめるような声で言った。シルは膝立ちになってベッドに横たわるセシルの顔を見る。

セシルはゆっくり右肩を上げかけて、身体を止めた。そして、本来なら右手があるはずの虚空をみつめていた。

「先生・・・俺、取り返しのつかないこと・・・」

シルが、もう一度謝ろうとした瞬間、セシルは勢い良く身体を起こ

し、左手でシルを抱き込んだ。突然のことにそのままシルの胸に抱かれる。女性特有のいい香りがシルを包み込んだ。

セシルは思い切りシルを抱きしめながら言う。

「男がぐじぐじするんじゃない！腕の一本や二本、すぐはえてくるさ」

「はえてこねーよ・・・！」

前のように笑顔を輝かせるセシルに震える声でシルが言葉を返した。少しの間の沈黙、その沈黙が晴れたとき、二人の顔が晴れる、小さなこらえるような笑い声は静かな保健室の中を包んだ。その傍らではリシアが丸いすに座ってその光景を眺めていた。



しばらくして二人が落ち着くと、セシルが声を掛けた。

「シル・・・あんたはこれからどうするつもりなんだい？」

「・・・どういう意味だよ？」

シルはセシルの肩を押し離しながら聞く。

「あの娘・・・アイリはこの学校を出るつもりだろう・・・着いて行ってやりな」

「・・・」

シルの返事はすぐには返って来なかった。

分からない、自分がどうしたいのか、どうするべきなのか、そしてセシルがどうしてそのように言うのか・・・

もしかしたら、セシルは自分のことを、そんなことをグルグルと考えていると、また目頭が熱くなってくるのがわかった。

「どうだい？」

そこからさらにしばらくの間、シルは考えた。そして。

「・・・俺、行くよ」

その答えがあっているのかはわからない、けど、この学校に残って先生と過ごして、この右腕を見るのも辛い、それに、彼女のことも気がかりだった。

シルの返事を聞いたセシルは左手でシルの頭を優しく撫でながら、ゆっくりとした口調でいう。

「そうかい・・・旅に出るにあたって、先生と四つほど約束してくれないか」

シルは黙ってうなずいた。

「まず、彼女を親族なり、何なりに預けることが出来たらこの場所に帰って来てくれ、二つ目は復讐や敵討ちなんてやらないこと、いいね？それは問題を解決する最善策じゃない、自分で考えて、一番いい方法で問題を解決するんだ。三つ目、自分を理解するんだ、こ

の旅の中で」

四つといいながらセシルは三つまでで言いたい事を行ってしまった。苦笑いしながら彼女は続ける。

「四つ目は・・・町に行ったらお土産を買ってきてくれ」

シルは、何だよそれ、と笑いながら応えた。

「旅に出るのはいいけど、アイリと同行できるかどうかは本人の同意がいるから、聞いてくるよ」

シルはベッドの脇から立ち上がりながら言う。セシルもすぐに返事を返した。

「ああ、行つて来い」

二人の教師に軽く会釈して保健室を出る。アイリを探して学校の中をうろろろするが、彼女の姿が見えない。

もしかしたら、もう出てるのかもしれない。そう思い立ち、校門のほうへ歩を進める。すると、玄関のところにローブ姿の少女はいた。後ろから声を掛ける。

「アイリ・・・」

彼女は驚いたように振り向いた。金色の髪がさらりと揺れる、彼女はシルの姿を確認し、少しうつむいて言葉を切り出した。

「あの・・・短い間だったけど・・・」

その言葉をシルが途中で遮る。

「俺も一緒に行く」

アイリの顔が勢い良く上がった。その表情はさっきよりも驚いているように見える。

「だめ！これ以上あなたに迷惑を掛けたくない！」

彼女は力強い口調でシルの言葉を拒否した。その言葉に秘められたものは、彼女の責任感の強さと、人を思いやる気持ち、シルを嫌っているという気持ちは微塵も無いのだろう。

それに対して、シルも言い返す。

「どうしても行きたいんだ」

「何のためにあなたがそこまで」

「単なる私事さ、自分探しの旅ってやつだよ」

シルはセシルとの約束を早速口実に遣わしてもらったのだった。彼女はそれを聞き、少しの間考えてから、言った。

「わかった、でもまだあの黒の魔導師たちが来るかもしれないし、どこに行くあてもないんだよ？」

シルは黙って、しかし、力強くうなづいた。

彼女もまた、少し間を空けてコクリと首を縦に小さく振る。

それからほんの数分でシルは自分の身支度をすませた。資金と、食料、寝具・・・食料は食堂のものももらい、寝具は自分の部屋の布団を持ち出してきた。旅出る旨を聞いたビスク先生が、生徒達にそれとなく理由を説明しておくと言ってくれた。

用意を終えた二人は顔を合わせて、「じゃあ、行くか」というようにうなづく。

玄関を出て、破壊された校門の前まで来た時、声が聞こえた。後ろから。

振り向いた先には二つの影がある、それは良く見慣れた姿だった。

「レイ、ラウル・・・どうして？」

シルが目点をしながら言う。レイは何も言わずつかつかとシルに歩み寄り、シルの横面を思いきりはたいた。運動場に軽快な音が響く、シルは以前にも同じようなことがあったことを思い出しながら、ヒリヒリと痛む頬を押さえながら声を張る。

「いつてー！なにすんだよ！！」

それ以上に大きな声を上げながらレイは人差し指をシルの胸に突きつける。

「うるさい！それはこっちの台詞よ、あんたこそなに考えてんの！  
？何で私たちに何も言わないのよ！！」

どずどすとシルの胸を突きながら自分の意見を垂れ流したレイは、最後に腕を組みながらこう言った。

「そもそも、あんたが居なきゃこの学校に居る意味が無いじゃない・・・」

最後のほうは台詞が尻すぼみになっていつてよく聞き取れなかった。シルが「なんだって？」と聞き返すと今度は逆の頬をひっぱたかれた。

流石にラウルも哀れみの目でシルを見ていた。

「ま、そういうことだ」

と、ラウルがいい、自分のまとめた旅支度を二人に見せる。

「けどなあ・・・お前らが旅についてくる理由が無いじゃないか」  
シルがラウルの荷物を押し返しながらかう、つまるどころ、シルはこの二人の同行には反対だった。理由としては先のアイリの台詞がそれである。

その言葉に、ラウルは自信ありげに答える。

「何言ってるんだ、俺は昔からお前の世話を焼いてきたんだ、その理由はお前が心配だからだ、社会に出てちゃんと大人やっていけるのか、とかな、その心配は今でも変わってないし、これからも変わる予定は無い、まあ単なる私情だけど、心配事を野に放り出すと夜も眠れなさそうだからな」

シルは、単なる“私事”と単なる“私情”とほぼ同じことを言っているのに気付き、眉をしかめた。それにはラウルの最後の言葉に納得してしまったのもある。

そしてシルはとりあえずラウルの同行は認めたのだった。

「でもレイと一緒に来る理由は……」

シルの言葉が遮られる、しかしそれは言葉によってではない、レイはシルの胸倉を左手で掴み上げ右手を思い切り握っていた。それを見たシルは冷や汗を浮かべながらとつさに「わ、わかった、わかった！お前も来てくれるんだな、いやー頼もしいなー！」とその凶器のような拳骨から逃れるための言葉を並べた。

「わかればいいのよ」

と、レイは極めてにこやかに笑いながらシルの胸倉を離した。

「……アイリもいいんだな？」

シルは胸元を整えながら、この会話を頭痛げに聞いていた少女に聞く。

「うん、いいよ」

その顔は笑顔と、諦めが入り混じる微妙な表情だった。

シルも苦笑いして見せながら、少し首をすくめた。

「じゃ、とりあえず南下してエルゼイラに向かおう」

そして、四人は校門をくぐり、三人が慣れ親しんだ学校を後にした。

校門から外に出ると、ラングドウシヤの町が広がっている。この学校は町のはずれにあるとはいえ、あのさわぎにより、人がかなり集まっていた。群がる人をこの町の自警団が抑えている。その人ごみを掻き分けながらすすみ、なんメールもありそんな人の壁をようやく抜けることが出来た。大荷物を持ってこの人ごみを抜けるのは骨が折れる。

町の広場まで歩くと、ラウルが他の三人に振り向きながら言う。

「じゃあ、まずこの近くで買い物だな」

「買い物？なにを買うの？」

その疑問を投げ掛けたのはアイリ、首を少し傾けて聞く彼女に、ラウルはすかさず応える。

「衣食住はひとしきり揃ってるけど、俺たちには今武器が無い、だから護身の武器を買っておかないと心もとないからな」

三人は「なるほど」と揃ってうなづく、そして四人は近場の武器屋に向かった。

その武器屋は古そうな木造建築で、看板には「The friend of the trip」（旅の友）と書かれていた。

古い木の扉を開けるとカランカランと乾いた鐘の音が四人を迎える。その店にはたいした明かりが無く、店内を照らしているのは数本のろうそくと、小さな窓から差し込む日の光だけだった。

周りにずらりと並ぶ武器を見ながら奥へと進む、棚と棚の間隔が若干狭い通路を曲がるとカウンターがあった。カウンターの中では両のこめかみから後頭部までを囲うように白髪を生やした老人だった。老人は四人に気付いたらしく、首だけをこっちに向けたが、すぐに顔を正面に向ける。ラウルが歩み寄り、老人に声を掛ける。相手が老人ということもあり、その声はゆっくりと、そしてはつきりとし

ていた。

「すいません、僕達とある理由で旅をすることになったのですが、武器がないんです。見たところ取り扱っている武器が多いようなので、僕達の得手不得手を査定してもらいたいです。そのほうが早いかと思うんです。なんなら、査定の方の感情も増やしてもらって構いません」

ラウルは終始丁寧に、はっきりと自分の用件を言い終えた。老人は少しの間沈黙してから口をもごもごと動かした。

「おまえさん・・・いくつだね」

「十七です」

どうやら、老人の査定とやらが始まったらしい。ふーん、と深い息をついて、また口を動かす。

「武術はならったか」

「剣術を」

ラウルは短い返答で淡々と応えていく、五つほどの質問が終わり、老人はラウルに指示する。

「あそこの、右から二番目の列の、一番上から三番目の列だ、その中から選びなさい」

ずいぶんアウトだな、とも思ったが、行ってみてすぐにわかった。そこには同じような刀身でも細かい部分が細かく異なる剣が並んでいた。

「この中から選ぶのか・・・」

そう漏らすとラウルはどこからとも無く出した生地の薄い白の手袋をはめて端から順に剣を取って見ていった。

そして、次にレイへの質問が始まっていた。

「そういえばアイリって武器使えるのか？」

レイの質問は気にせずふと気になったことを投げ掛ける。

「ううん、武器なんて一度も・・・」

少女は申し訳なさそうに首を振る。

「そうだろうな、普通はそうなんだよ、自分が自警団とか騎士にでもなりたいたいと思わないかぎりはな」

彼の言葉は、彼女へのフォローと、あちこちの国が戦争に向けて準備しているというのが気に入らないとも言っているようにも思えた。そしてレイの質問も終ったらしく、レイは今度は入り口の列の隣の列に入っていた。ラウルはまだ剣を見て回っているらしい、そして、シルが老人の前に立った。

「なあじいさん、あんたもしかして鍛冶師とかだったのか？」

「昔の話だ」

老人は自分の後ろにある扉を見つめる、奥が工房になっているようだ。

「俺そこにある槌が欲しいんだわ」

老人はその言葉に目を見開いた。そして、間を置いてから話し出す。

「そんなことを言ってきたのは、この店を開いて、何十年も経つが・・・二人目じゃな」

老人はそのまま話を続けた。

「やつはおかしな人間でな、年は二十半ばじゃったと思うが・・・おぬしらのように旅に出ると言うとな。わしがもつと見栄えがする武器もあるというとな、『自分は愛されているものを集めているんだ』などと言いよる。自分の道具がほめられたような気がしてな、嬉しくなつて、そ奴にくれてやったわ」

老人は懐かしそうに語る、シルとアイリは黙ってその話を聞いてい



た。

「その七年後じゃった、その男が帰って来てな、以前の槌をわしに返して来たのじゃ、旅の道中すっかり自分を守ってくれたといつてな、そして奴は、もらったものを返して回っているらしかつた。おかしな奴じゃ、まあわしにも分からぬ理由があつたのだろうがな・・・少し関係ない話をしすぎたか、お前さんはどうしてこの槌を持って行く？理由によってはくれてやろう、もう三十年使い続けておる槌じゃ、わしと同じで老いておるだろうがな・・・」

そついつて老人はじつとシルの目を見る、目を合わせたままシルは答えた。

「それが気に入ったからだ、好きな事に理由があるかい？おじいさん」

老人は「なるほど」と数回うなづいた。そして、自分の後ろにおいてあつた槌を取り、シルに渡す。

「持って行け」

それを受け取つたシルは言葉を返した。

「そつだ、この辺にこの店と爺さんの名前を入れてくれ、また返しに来るよ」

シルは持ち手の柄頭の下部分を指しながら笑う、すぐにその部分に店と店主の老人の名前が加えられた。

The friend of the trip Bellgan  
筆記体で文字を書き終えた老人は槌を突き出し、「楽しみに待つておる」といつた。シルがそれを受け取つた頃、二人もようやく武器を選び終えたようで、カウンターに戻つてきた。

「じゃあ、これを」

ラウルが刀身の細い剣を置く、老人はそれを手に取り、色々な方向から眺めてからいつた。

「良いのを選んだな、お前さんにぴったりだ、相性のいい武器は自分を強くし、お前さんを守ってくれるだろう」

そして、老人はカウンターの下から一本の鞘を取り出した。黒く、

装飾はほとんどない。黒の革の差し入れ口と末端につけられた鋼の銀が鈍く光を放っていた。

「ありがとうございます」

そういつてラウルは金貨の入った袋をカウンターに置いた。

「じゃあ私はこれね」

そういつてカウンターに置かれたのは、トンファー、五十センチほどある木製の棒の先端近くから垂直に同じ材質の短い握りが出ている。

老人はそれを見て、深くうなずいてからレイと金貨の袋とトンファー二本を交換するように渡した。

「ありがとうございます、爺さん、また来るよ」

シルは槌を上げながら挨拶を済ませ、店をでた。

「さて、ここからは延々と歩くぞ！」

そういつたのはラウルだった。目標にしているのはエルゼイラ、大きな都市なため、彼女の情報を得ることができかもしれないというのが一番の理由で、他の都市に行くよりずっと楽というのも理由に含まれていた。

エルゼイラはラングドウシャから歩いて約三日のところにある。それまでにはポーラという町があるため、休憩する場所も問題ない。

四人はラングドウシャの南門の前にはたっていた。目の前には広大な草原とその中を突っ切る一本の街道がある。

そして、四人は門をくぐった。

彼らの旅立ちには晴天に見舞われ、東からのかすかな風も心地よく吹いていた。

「さあ、早く行こう、夜までには次の町に行かないと！」

太陽は少し西に傾き始めていた。

ラングドウシヤを発つて数時間、四人はタング平原を貫くユリーク街道をひたすら歩いてきたが、早速、シルに疲れの色が見え始めていた。

「なあ・・・まだつかねーの？」

もう四、五度目になるシルの同じ台詞、ラウルは前と同じ返事を返した。

「まだだな」

そのたつた四文字はシルの心を粉碎した。

「もう無理、歩けん・・・」

そうぼやく少年は槌を杖のように突きながら先を行く三人に若干遅れながら歩いていた。

「まったく、せつかくの槌がもう杖と化してるぞ」

ラウルが腰に手を当てながらため息まじりに言う。その言葉にシルが言い返す。

「モノは使いようだ、臨機応変、量体裁衣、当意即妙、何事もその場で判断して使っていかないとな、お前は、剣は相手を切るものだからとか言つて剣で相手の攻撃を防がないのか？」

ラウルは両手のひらを上に向けて降参の意思を示した。シルに言い合いで勝つのは至難の技だと、彼も悟つたのだろう。

「だからと言つてここで休むわけにも行かないよ、なんとか夜までにはポーラに到着して休憩したいからね」

『ポーラ』というのはラングドウシヤとエルゼイラの間にある小さな町である。広大なタング平原の土地を利用した麦の栽培で有名な町だ。

「後どれくらいかかる？」

「シルが早く歩けば、歩くほど早くつくよ」

ラウルは上手い具合に言葉を返せたと満足げな表情をしている。

シルは少し不機嫌そうな顔をしながら、つぶやく。

「だって周りに変化がねえんだよ・・・どこまで行っても草、草、草、草で足が進むか！」

草を連呼するシルに身振りを交えながらラウルが言った。

「そんなことないぞ、確かに一見同じようでもさ、細かいところはまったく違うぞ？空の雲とかさ、草の中に居る虫とか・・・」

「わかったわかった！もういい、お前のいるんなところを学ぶべきだと思ってるけど、俺はそのロマンチスト的思考まで学ぼうとは思わない、歩くよ、歩く、歩けばいいんだろ、歩くよ」

草の次は歩くを連呼しながらシルはやけくそ気味に叫んだ、しぶしぶ重い足を挙げ、歩を進める。前にも言ったとおり、ラウルは見てくれも良く、運動神経もいい、そして勉強も出来る、そしてさらには感性豊かというスキルまで備わっている。

おそらく「完璧」に近い人間なのだろう、まるで、童話なんかの主人公のようだ。

と、シルが歩き始めた瞬間だった。

少し小高くなっている丘の上に数人の人影が見える、服装から見てこの間の魔導師の関係とは思えない。そしてその一段はシルたちに近付いてきた。さらに男たちが言う。

「おい、兄ちゃんたち、あるもの全部置いていきな」

そこで理解する。こいつらは山賊だと。

おそらく、子供だけで力づくで奪うことになったとしても楽だということなのだろう、あとは旅人にしてはきれいな服と大きな荷物を見てのことだろう。

「それはできない、俺たちは今急いでる、どいてくれ」

ラウルは二人の女子を自分の後ろにかばいながら相手を鋭く睨みつける。しかし山賊は意に介せずと言う。

「分かってんのか、兄ちゃん、今なら何もせずに逃がしてやるって言うてんだ。荷物と命どっちが大事なんだ？」

野太い声で言うてくる男に返事したのはシルだった。

「悪いけど、おじさんたちには何も渡せないよ、さっき言ったとおり、急いでるんだ。この荷物を持ってポーラまで言ってくれるなら銀貨の一枚でも出すかもしれないけど」

その言葉に山賊のリーダーらしき男はこめかみに血管を浮き出させた。

「ごんの糞餓鬼が！」

そういうと山賊の一段全員が短剣やら棍棒やらを振り上げる。シルはジリツと後ずさって、戦闘態勢に入ったレイとラウルの後ろに回りながら「後は任せた」という。

場を悪くしておいて任せたものにも無いと思いつつも、二人は向かってくる山賊に武器を向けた。新品のラウルの剣が明るく光を反射する。

そして、互いの武器がぶつかり合う。

ラウルの剣と山賊の剣の刃がぶつかり、火花を散らす。ラウルは攻撃を受け止めることはせず、するりと相手の剣を流すように攻撃をかわす。そして、小さな隙が出来た瞬間を攻撃する、ラウルの常套手段だ。

剣技で敵と相対するとき、ラウルはほとんど動きを止めない。常に攻防に徹し、自分が怪我をしない動きをとる。彼の行動は計算しつくされたものだった。二人、三人を相手にしても、自分の横より後ろに回らせない、同時の攻撃は回避し、ばらばらの攻撃は一つ一つ確実に受け流す。

そんなラウルと退治した奴は例え攻撃を一発も受けなくとも、持久力で負ける。すでに山賊は方を上下させ始めていた。

一方のレイはラウルとはまったく戦い方が異なる。彼女は・・・とにかく力でごり押し、ねじ伏せる。おそらくシルたちの学校内で唯一ラウルに勝った女子である。得意武器は小手やトンファー、攻撃と受けを繰り返すラウルとは違い、彼女は、受けない、いや、相手に攻撃させる時間を与えない。

物凄い勢いで左右から攻撃される相手は必然的に受けに回ることになる、しかし、彼女の攻撃を受けきれぬ者は多くない、手だけに意識を集中するとほかが見えなくなり、突然の蹴りに気付かないのだ。意識の行き届いてない足を払われたりした時には降参を認めるしかない、もつとも、白旗を上げる前にのどにトンファアの先端が突きつけられているだろう。

ラウルが一人目をお互い無傷で戦意喪失させた頃、レイは四人の意識を奪い、最後の一人に自慢の武器を振るっていた。山賊の棍棒も、やはり彼女を捕らえることは出来ず、受けのみに回っていた。

そして、相手の体が傾く、足を取られたのだ、地面に背中から倒れこむ中太りの男の両腕を左手のトンファアと右足で押さえつけ、喉にトンファアの末端を突きつけ、男の上に乗った状態でレイが言う。「まだやる？」

山賊の男の答えはもちろんノーであった。息も絶え絶えな山賊二人は意識を失った四人を担ぎ捨て台詞をはきながら去っていった。

「さて、一件落着だな」  
シルは、やっと終わった、と言うように伸びをしている。それを見たラウルはため息交じりに抗議する。

「お前なー、火をつけたただけで後は傍観って、悪質すぎるだろ！少しは手伝え」

ラウルの言うことにレイも同意を示した。ラウルはともかく、レイは楽しそうに遣り合っていたように見えたのは言わないでおいだ。

「俺がそんな風にかっこよく戦える玉かよ、無理無理、俺は武器とかが使えねえし、だから振り回しても刃こぼれしたりしない槌を選んだんだぜ？」

「そういうことにしといてやるよ、で、アイリは大丈夫だったか？」

「うん、大丈夫、二人ともすごかったね！」

そういつて彼女は目を輝かせた。

その言葉に二人ともシルへの不満は消え、お互いに照れるそぶりを  
見せた。

「じゃあ、行こうか」

少し時間を取ってしまったが、四人は歩き始めた。このまま何も無  
く歩き続ければ、日が落ちる直前にはポラについているはずであ  
る。

そして、ポーラに着くまで数時間、文字通り彼らは歩き続けた。と言っても歩くのはちゃんと舗装された街道、しかもただ野原を歩くだけなので危険はほとんど無い、あるとすれば、山賊か、召喚師の居ない、『はぐれ』と呼ばれる、いわば野良召喚獣ぐらいだろう。近くに森など無いので、狼も居ないはずである。道中、シルはアイリに話しかけた。

「なあ、アイリって親戚とか、いるのか？」

流石のシルもかなり悩んでから問いかけたようだ、心配そうに彼女の顔を伺うように少しずつ言葉を押し出した。

アイリはかぶりを振り、応える。

「あつたことは無いの」

「そうか・・・じゃあ、なんか手がかりになりそうなものはないのか？」

アイリはさつきと同じようにかぶりを振るが、言葉は無かった。シルもまた「そうか」とだけ呟き、手に握られた槌の頭を眺めながら、学校を発つ直前、ビスクに言われたことを思い出していた。

・・・いいか、シル、そのお前の力は使わないように心がける、いいな？ わしもあんな魔法を見たのは初めてだ。陣を描かずに魔法を発動するなど、しかも最高クラスの魔法を、だ、普通は有り得ん、この旅を穩便なものにしたいなら普通ではないところは隠せ・・・

(無事に帰って来いよ・・・か、迷惑かけた先生に限ってそんなこと言ってくれるんだな)

心の中で苦笑していると、表情にも出ていたらしい、隣からレイが「どうしたの？」と顔を覗き込んでいる。



「いや、なんでもない」

レイは「気になるじゃないの」と言いつつもそれ以上の詮索はしなかった。

それからさらに大分歩き、ようやく、ポーラの町明かりが見えてきた。

「やっとついた」

そう漏らしたのはシルだった。

結局あたりはずいぶん暗くなってしまっていた。

「急いで泊まれる宿を探そう」

ラウルの声に他の三人もうなづいた。

四人は町の大通りを歩く。両側の家々からは晚餐のいい香りが四人の鼻をくすぐる、そのとき。「くっ」という音が響いた。同時に聞こえたのはアイリの「あっ」という声。ラウルとレイの二人は反射的にアイリのほうを見る、二人から見て、アイリの左側に居るシルがわざとらしく大きな声で言う。

「ああー腹減ったよ！さっさと適当な宿見つけて飯食おうぜ！」

その言葉に、ラウルが笑みを浮かべながら「そうだな！」と言った。「あ、これ」

突然呟いたのはアイリ、歩を止め、お店と思われる建物の看板を見上げている。少し通り過ぎた三人はその場所まで戻ってきて言う。

「どうかしたのか？」

看板には『陽の宿』と書かれていた。

「おお、宿発見！アイリナイス！」

シルは宿を見つけ、晚餐が近づいてきたことにテンションを上げた。ラウルが宿の木でできたドアを三、四回叩いた。すぐに中から人が出てくる。出てきたのはピンクのお下げを腰辺りまで下ろしたまだ十代に見える女性だった。二十歳前くらいだろうか、レイやシルよりは大人びて見える。翡翠色の瞳と、右の頬にある三つの並んだ黒子が印象的な彼女は四人を見るなり、「お客さん？」と言った。

すぐにラウルが応える。

「はい、四人です。部屋はありますか？出来れば二部屋貸していた  
だきたいんですが」

女性陣のことを考えて部屋を頼むあたり、ラウルである。シルだと、  
「金かかるし一部屋で良いよな？」なんて言い出しかねない。

彼女は明るい声で言う。

「はいはい、四名さま部屋二つですね、着いて来て」

そういうと彼女は四人にいくいくと手招きする。中に入ると広い空  
間が広がっていた。奥では大きな火にかけられ、グツグツと  
音を立てながらいい香りを漂わせていた。案内する彼女は玄関を入  
ってすぐ左手にある階段を上っていく。シルたちも後に続く、そこ  
そこ急な階段を膝下ほどの丈のスカートで上るのを見上げていたシ  
ルをラウルが小突く。

「このことその隣」

と、階段を上りきったところから二番目と、三番目の部屋を指差し  
た。

「準備が出来たら晩御飯取りに降りてきてね」

そついい残し、彼女は軽快な足取りで階段を下りていった。

男子と女子に別れて部屋に入り、荷物を適当な場所に下ろした。部  
屋は入って右側にベッドが二つ並び、反対側にはテーブルが置いて  
ある。南側には雨戸の閉められた窓がある。

「いい感じだな」

早速ベッドでぼんぼんと身体を弾ませているシルが文字通り無邪気  
に言う。

ラウルは「子供か」と呆れ顔だが。

「よし、俺が晩飯もらってくる！」

「いや、それはなんか心配だから僕が行く」

先の階段でのことと、あとはつまみ食いなどを危惧した上での言葉  
だった。

「じゃあお前行って来い」

そこから二人は言葉を互いにくつかぶつけあった、ラウルが廊下に出てドアを閉めるまで。廊下に出るとレイも出てきていた。二人揃って先ほど上ってきた階段を下りる。するとさっきの娘が椅子に座って待っていた。彼女は二人の顔を見ると腰を上げ、器に先ほど火にかけていたものを皿に移した。

「はい、アネルカ特性ホワイトシチュー！」

「アネルカって言うんですか？」

ラウルの言葉にハッと何か気付いたようなそぶりを見せた彼女はいう。

「そういえば名前教えて無かったわね！私アネルカ、この店の看板娘ね」

最後の一文は笑いながら言っているので、冗談のつもりのようなのだ。それに続いて二人も挨拶する。

「俺、ラウルっていいいます、もう一人のほうはシル」

「あたしがレイで、金髪の子がアイリ」

挨拶を済ましたところで、二人の手にトレイが渡された。上にはパンとミルクが乗っている、そこに入れたたてのシチューが追加され、ディナーのメニューが揃った。アネルカの気をつけてね、と言う言葉に二人で揃って軽く会釈して、階段を上る。ラウルが、一段目を踏み出しかけて足を止める。

「そういえば、アネルカさんがこの宿主さん？」

アネルカは相変わらずの明るさで応える。

「違う違う、今は私だけしか居ないけどね、お母さんがいるの、今ちょっと腰を言わせちゃって病院だけど」

クイとラウルに向かってお尻を突き出すようにして腰を示した。彼女にとっては、分かりやすく示しただけなのだろうが、ラウルは勢い良く視線を逸らした。そして、視線を戻さずに言う。

「じゃあ、食べ終えたら食器は持って降りてくれば良いんですね？」

「うん、お願いね」

それだけ聞くとラウルは足早に二回へ上がっていった。

「晩御飯、もらってきたぞ」

シルは「ああ」とだけ言った。どことなく機嫌が悪いような雰囲気をかもし出している。ラウルがその様子を見て、テーブルに晚餐を置きつつ言う。

「どうした？腹が減ってるのか？だったら早めに食ってくれよ、食器はまた持って降りないといけないらしいからな」

「腹が減つてるとかじゃない、あと、お前に小突かれたからでも、晩飯を取りに行かなかったからでもない」

と、言いながらシルは椅子を引く、座るとギツと少しきしむ音がした。

ラウルも腰を下ろしながら「はいはい」なんて適当に返事している。

「とりあえず食べよう、はやめに風呂にも入りたいしな」

それにはシルも同意を示し、二人はパンとアネルカ特製のシチューに手をつける。

「美味しいな」

「ああ、美味しい」

お互いにその感想を言い合う。アネルカのシチューは確かに美味しかった。とろっとしていて、野菜もふんだんに入っている。一緒についてきたパンとよく合う。

今までのシチューとは何かが違う、隠し味に何かあるのだろうか、二人にはそれがなんなのかは分からなかった。

二人ともが皿の上のものをきれいに腹に収めると、シルが立ち上がった。

「じゃあ、皿は片付けて、風呂借りようぜ？」

そうだな、と言いながら、ラウルも立ち上がる、また座った時のように椅子が少しきしむ、ドアを空け、階段を下りたさきではアネル

カがお菓子を片手にコーヒを啜っていた。その空間にコーヒの香ばしい香りが漂っていた。

彼女は顔だけこちらを向ける。

「あ、どうだった？口に合ったらよかったんだけど」

「美味しかったですよ」

ラウルがすぐに応える、彼女は「よかった」と言って笑みを浮かべた。

「で、お風呂借りたいんですけど、いいですか？」

「うん、いいよ！そのドアの向こうね」

そういつて彼女が指したのはさつき降りてきた階段の隣の壁、そこには玄関と同じく木でできた引き戸があった。

そのドアを開けると、廊下はすぐ左に伸びていた。奥まで行くと再びドアに突き当たる。その向うが浴室らしい。

その頃、か弱い少女達、もといか弱い少女と、強すぎる少女の二人は晚餐に舌鼓を打ちながら女子水入らずで駄弁っていた。

と言っても、年頃の少女がする話ではなく、もっと暗い雰囲気の話である。

「これから先、大丈夫なのかなあ」

以外にも、そう呟いたのはレイだった。

彼女は、普通の女子の数倍まして明るい性格だが、今後のことをまったく考えないほど、無計画でも、のんきでもなかった。

レイの言葉に、アイリも表情が固くなる。

「ずっと同じところにとどまってるわけには行かない・・・きつと、誰かに迷惑をかけるわ」

右手で持ったパン越しに、見慣れ始めた彼女の、アイリの申し訳なさそうな顔を見る。

「大丈夫・・・大丈夫だよ！あたしが着いてるし、四人もいるんだから！」

その言葉は、どこか、自分を励ます自己暗示にも思えたが、アイリの表情も明るいものへ変わった。

レイがパンを大きく口に頬張る、もごもごと口を動かしながら、聞き取りづらい声で言う。

「で、アイリはどう思う？」

唐突なレイの台詞、アイリにはその内容は伝わっていない、レイは若干頬を染めつつ下を向いている。

「えっと・・・それって今後の・・・？」

分からないなりに、何のことを言っているのか推理しようとしたアイリだったが、答えはすぐにパンを飲み込んだレイの口から聞こえてきた。

「シルのこと、どう思う！？」

予想がはずれ、肩透かしを食らったようになるアイリと、意を決したように早口で言ったレイの二人を沈黙が包み込む。少し返事に困りながら、アイリが聞き返す。

「レイは・・・どうなの？」

それはこの質問の意味を探るためと、時間稼ぎの二つの意味を持つ言葉、ここで、レイがなにを言うかによって、返答を考えようとしていた。

切り返されたレイが戸惑い始める。

「いや、あたしは別になんとも思っていないというか、ただの幼馴染というか、無神経だし、女心は分からないし、馬鹿でアホで屁理屈ばっかだけど・・・たまに、かっこいいんだよね」

罵倒7に対して好印象な単語が一つしか聞きつけられなかったが、アイリはプラス思考に、シルのことをよく見てるんだなあ。と考えていた。そして、質問の矛先は彼女へと戻ってくるのだった。

「アイリは、どうおもう？」

アイリはシルほど鈍いわけではないので、レイの彼に対する思いというものを理解しているつもりだった。そこで、どう応えるべきかはおのずと決まってくる。

「シルもラウルも、すごくやさしくていい人だと思う」

とりあえず、質問はシルについてだけだったが、ラウルも評価することで特別な思いがないというアピールを試してみる。

それを聞いたレイは表情を変えることこそしなかったが、明らかに胸をなでおろしていた。

「何でそんなことを？」と、聞くのも愚問なので、あえて沈黙を選ぶことにした。幸い料理がまだ残っていたので、静かな空間も気まぐずいものではなかった。

二人の食器の上が片付いて、少し立つと、ドアがノックされた。どちらとも無く「どうぞ」と声を掛ける。

ドアが開き、その向こうからラウルが顔を見せる。

「お風呂どうぞってさ、アネルカさんが」

はい、と答えたのはレイだった。ラウルが顔を引っ込めてから程なくして二人が廊下に出る。時刻は十時になるうとしていた。



二人は階段を下り、アネルカから先の男二人と同じように説明を受ける。

大きく息を吐いたアネルカは、と重力に身を任せてドサツと椅子に腰を下ろした。もう一度大きく息を吐きながら頭も後ろのほうに倒している。

そこに、階段からコツコツと音を立てて誰かが下りてくる、よっほど疲れているのか、彼女は気付いていない。

「お疲れですなあ」

ガタツと音を立てながら彼女は文字通り飛び起きた。

「あ、シル君・・・」

どうして自分の名前を知っているのか、などという些細な疑問も彼は抱かなかつた。それはラウルが寝る前にその旨を説明してくれていたからだった。だから、彼には彼女の名前も聞く必要はすでに無いのだが。

「えっと、アネルカ、だっけ？」

と、なんとなく聞いてしまうのだった。

「うん、よろしくね、シル君」

「呼び捨てで良いよ、年上だろ？」

「そう？じゃあシル、ちよっとお話ししようよ」

彼女はそういいながら、テーブルの自分の向かい側をちよんと指で示していた。

「じゃあ、失礼しましょうかね」

確かに彼女は年上なのだが、シルにはまったく気を使っているそぶりがない。しかしそんなことは気にかげず、彼女は質問してきた。

「あなたたちはどうして旅なんかしてるの？まだ旅を始めて間はないよね？」

投げ掛けられた二つの質問、一つ目は好奇心からだろうか、完全に

疑問形だったが、二つ目は衣服などで分かったのだろう、疑問と言  
うよりも、確信か確認に近かった。

シルはとりあえず後半の質問にうなづいた。

「ああ、旅に出たのは今日だ、理由は、一緒にいるアイリの親戚探  
しだ」

「ふーん、そうなんだ、次に行くのはエルゼイラかな？」

彼女は頬杖をつきながら聞く、これは先で言うどっちの意味なのか、  
シルには分からなかった。

「ああ、明日の朝にはここを発つ予定だ」

「そっかあ、さみしくなるなあ」

彼女はかわいらしく言ってみせる、そういうところの意味や感情を  
読み取るのがとことん苦手なシルの返事はどうも話をややこしくし  
てしまう。

「またくるよ、いつか」

「うん、約束ね」

そういつて彼女は細い小指をシルの前に突き出してきた。初対面の  
相手でもボディタッチはあまり気にしないようだ、まあこのあたりの  
小さな村町ではそんなことを気にするほうが少数なのかもしれない  
が……

シルは一瞬躊躇ったが、彼女の小指と自分の小指を交差させた。

こうして彼は一日にして二つの約束を交わした。

「あ、そうそうー！」

彼女は指を解くと、右の手を握って左の掌をぽんと叩いた。それは  
主に忘れていたことを思い出すときにする仕草なので、何を言われ  
るのかと、彼も若干身構えた。

シルは聞き返すことこそしなかったが、すぐに彼女は語りだした。

「最近このあたりで『はぐれ』が出てるらしいから気をつけたほう  
が良いよ」

『はぐれ』、と言うのは、主に幻界の生き物である。限界の生き物

は、魔法陣によるゲートでのみこの世界に来ることができる。そして、その行為をこの世界の人は「召喚」と呼んでいる。それが何らかの理由で召喚した主を失ったのがはぐれである。彼らが幻界に帰るには来た時とまったく同じゲートを通らなくてはいけない。

召喚の原理などは、未だに解明されていないことが多いので、はぐれが幻界に帰ることは稀である。

「はぐれか・・・出くわすと厄介だな」

彼女から得られたのはなかなか有力な情報だった。その情報を持って出発すると、知らずに出発するのではかなりの差がある。

シルは彼女に「ありがとう」とお礼を言っておいた。

彼女から帰ってきたのは、はぐれのありがたい追加情報だった。

「この村の周りの林に住み着いてるみたいなの、村のほうにも出てきて、いろいろ漁ってたりするみたいだから、気をつけて、あと、見た目は大きな猿みたいだったって聞いたわ」

「そうか、助かるよ、で、情報料とかいいの？」

言い終えてから、余計なことを言ったかな？とも思ったが、どうやらそれは杞憂に終わったようだ。

「いいのいいの、気にしないで、でも今度は情報料もらっちゃおっかな？」

そういつて彼女は意地の悪い笑顔をシルに向けて見せた。シルは特に言葉を返さず後ろ頭を掻いていた。

「商売が上手いんだな、宿屋よりなにか売ったほうが儲かるんじゃないか？」

その言葉はあながち世辞と言うわけでもなかった。先ほどの指きりのポディータツチャ、はぐれの情報、それらはまた客をこの宿に泊まらせるための行動だったのかもしれない、と深読みしてのことだった。

相手に好印象を与えることでまたここに足を運ぶようにしているん

じゃないだろうか。

触れ合うにしろ、情報にしろ、いくら触るうが、喋るうが、直接金にはならないから、それでまた宿を使ってくれるなら安いものなのだろう。

そんなことを考えながらまんまと「また来る」と約束してしまっている自分々に苦笑する。「お世辞が上手いのね」

と、思っていた通りの言葉が返ってきた。

雑談、ボディータッチ、情報ときて世辞。これで好印象を持たない男はいるだろうかとさえ思う。

彼女の行動を思い返すといろいろとそう思わせるものがあることに気づき、シルは掌を天井に仰がせた。

「勉強になったよ」

言うつもりはなかったのだが、つい口をついてしまった。相手にそのつもりがなければ失礼になると思って、失言を悔いていたが、彼女は意外そうな表情を見せた後、すぐもとの表情に戻って言った。

「もしかして気付いてたの？」

その言葉はつまり、シルの考えがあたっていたことを教えていた。

「たったいま気付いたところさ」

さらりと言う目の前の男にアネル力は少し悔しそうな顔をした。

「シル君て意外と鋭い？」

「気をつける、今のやり方だといろいろ色々勘違いしそうな奴がいそうだ」

ため息混じりに言い捨てたシルにアネル力が笑ってみせる。その笑顔は大丈夫だよ、と言っているようだった。

不意に扉が開く、音のほうに目を向けると、女子二人が風呂から上がってきたところのようだ。

「何話してたの？」

聞いてきたのはレイだった。心なしな表情が怖いような気がしたが、いつもこんな感じだったかな、と片付けてしまるのがシルである。

「いや、ちょっとした雑談だよ、もう寝ようかと思っていたところ

さ」

レイの言葉への弁解の意味はまったく持っていないが、その言葉はプラスに働いたらしく、レイの表情も柔らかいものになった。

「じゃあおやすみ」

と、アネルカに挨拶を交わし、女子二人の先に立って二回へと上がっていく。

部屋に戻るとラウルは布団の中で寝息を立てていた。驚くほど健全な生活を送っている幼馴染と自分を見比べて布団にもぐりこむ。彼の意識はすぐに深く暗く沈んでいった。

その頃、上空を旋回する一つの影があった。シルたちは気付いていない。

「よし、グラム・・・飯にしよう」

黒い影は旋回しながら広い草原に降下していく。

そこには赤褐色の毛を生やした大猿の姿が、肩にはピンクのお下げをしている女性が担がれている。

「うう・・・離してよっ」

肩に担がれてアネル力は大猿と格闘していたが、引き離そうとする手がとまる。諦めたのではない、大猿よりも、さらに圧倒的な存在を感じたためだった。

彼女と大猿に影が落ちる。彼女は上空を見上げて驚愕する。

「なに・・・これ？」

驚愕したのは大猿も同じだったようだ、上を見上げて大口をあけている。

それもそのはずである。彼らの頭上にいたのは、巨大な龍、大きな頭からするりと長い首が伸び、腹は丈夫そうなることで覆われている。背中からはえた両翼はその体長の半分以上もありそうなくらい大きいがつしりした足の付け根からは大蛇のような尾がしなやかに伸びていた。

そしてその巨体は真っ直ぐ大ざるへと降下してくる。

ズシャツというような聞きなれない音が響いた。ばきばきと何かが折れる音も聞こえている。そして、次に聞こえてきたのはその巨大な龍の咆哮だった。

爆音のような声が大地を振動させる。周りの動物達も一目散に逃げ出していった。

そしてその巨大な咆哮はこの男にも届いていた。

「・・・なんだ？この声・・・」

とにかくその方向に足を向ける。

声のほうに向かって草の壁を書き分けていると、突然視界が開けた。草原のと真ん中、この場所も今までのようにシルでは草に埋もれてしまっはずだが、それでも広場のように円形に開けているのは巨大な龍が着地する際の突風が草をなぎ倒したものだった。

すぐにシルの視界に入ってきたのはその龍、黒い巨体に、真紅の目、その鋭い眼光でシルを睨みつけている。

慌てて槌を握りなおそうとして、槌を取り落とした。自分の掌を見ると血で真っ赤に染まっていた。小ささまざまな傷口からはまだ鮮血が溢れ出していた。

痛み在眉をしかめながらも槌を拾う。そこで、その龍の傍に一人の女性が立っているのに気付いた。ルビーのような赤髪を背中の中ほどまで下ろしている。少し癖のある髪は風でゆっくりと揺れている。黒を基調とした服装は縁を赤で刺繍してある程度で装飾はほとんど無い。足の先まで隠れるほどの長いスカートには腰ぐらまでの深いスリットが入っていて、白い足が見え隠れしている。左腰には剣を差した銀色の鞘がぶら下がっている。

そしてシルの視線はさらにその女性から移る、その女性の肩にはアネルカが担がれている、どうやら気を失っているらしい。

シルは警戒しながらも槌を下ろし、声を掛ける。

「その子をどうするつもりだ？」

赤髪の女性は意味深な笑みを浮かべながら応える。

「さて、どうしようかねえ」

少し低めのその声が表情と同じく意味深な雰囲気醸し出す。

「その子を渡してくれ、宿屋の娘だ、まだ感情を渡してない」

頬を汗が伝っていくのを感じながら、シルは右手を差し出した。

その女性は肩に担がれた女性を少し見てから言った。

「ただでかい？あたしに得が無いね」

シルはその言葉に苦い顔をする。

「奴隷商人でもないだろう？あんたは」

「ふふつ、そつちのほうはまだ儲かるだろうねえ」

嫌味とも取れそうな彼女の言葉だったが、シルは淡々と言う。

「じゃあ渡してくれ、なんならその人をあのはぐれから助けてくれた礼もする・・・あまり金はないが・・・」

「ああわかった、こいつは返す、ただ、金はいらない」

少し意外そうな顔をしたシルが持っている槌を彼女はじっと見ていた。

「ただ、あたしと一太刀やりあわないか？」

「・・・どういうことだ？」

「なあに、たいした意味は無いのさ、ただ、あんたが強そうだったからね」

その言葉をシルは鼻で笑う。

「フン、なにを言い出すかと思えば、俺は一介の子供だぞ？そんな実力ねえよ、あんたがどれほどの実力でも俺が勝てるとは思えないね」

なんとも卑屈で、後ろ向きな弁解だが、確かにその通りだった、彼女はおそらくシルより年上で、実績も積んでいると見える。しかもこんな条件を出してきた時点である程度腕が立つことは分かる。

普通はこんな申し出は断るべきなのだが、そういうわけにも行かない。なぜなら、ここで断ると彼女があそこではぐれをむしゃむしゃと喰っている龍の餌になりかねない。気分が悪くなるその食事風景から目を逸らし、彼女の提案にうなづいた。

「グラム！」

彼女がそう叫ぶと、さっきまではぐれを漁っていたドラゴンが彼女に近付いて来る。すると、その龍の口が開かれ、そこにアネル力を差し出す。

シルは思わず「お、おい！」と叫んでいた。

しかし彼女はまったく動じることなく。

「大丈夫だよ、ちよいとお姫様を預けるだけさ」

言い終わったころには、その龍が起用にアネル力の服だけを啜えて



二人の様子を見ていた。

安心したが、不安は残る、今の状態でもやつが彼女を飲み込むのに要する時間は数秒も要らないだろう。

その心配を振り払うように頭を振り、意識を目の前で赤髪を揺らしている女に戻す。

「で、どうすればいいんだ？」

「攻撃を打ち込んできな、思い切り、あたしからは攻撃しない」

「・・・わかった」

シルの言葉の後に彼女は「手加減はいらないよ」と釘を刺した。

だまってうなづくシルを見てから、彼女とシルは距離をとった。

辺りがしんと静まり返る。

少しして、風が吹く、あたりの草がざわめき、彼女の赤髪が揺れる、そして、風がやんだ時、シルは足に力を入れ、飛び出した。

いや、飛び“出そうと”した。

彼の足はある声によって止められた。後ろから不意に聞こえた声はラウルのものだった。シルとラウルの目が合う。

ラウルは、シルとその前に立っているまったく面識の無い女性と、

口にアネルカを啜えた巨体をぐるぐると見回した。

「説明が欲しいな」

流石に状況を見ただけではなにが起こっているのかわからなかったらしいラウルが聞いてくる。しかし、ここで説明を始めるのももどかしい、とりあえず適当にあしらう方法を考えていた時だった。

彼女がシルたちの下へ歩み寄ってくる。アネルカを抱えて。

「ほら、こいつを一時預かってたんだよ、返すところだったのさ」

ラウルにアネルカを押し付けるように手渡すと彼女はくるりと踵を返した。

そしてシルの耳元で小さく囁く。

「また会おう」

その言葉にどのような思いがあるのかはシルには分からなかったが、名前も知らないのだ、もう会わないだろうと心の中では思っていた。

彼女は足早に龍に近付き、軽い足取りでその巨体を駆け上った。すぐに広い翼が開き、周りに影を作った。

それが羽ばたくと同時に、その場所は突風に包まれた。再び草をなぎ倒すほどの風を起こして、一気に上空まで舞い上がった。そしてその姿はあつという間に小さな鳥のようになっていた。

「シル、さっきの女の人は、知り合いか？」

アネルカをお姫様抱っこした状態でラウルが聞く。後のレイとアイリの二人も同じことを思っていたようだ。

「いや、まったく、名前も知らないよ」

「なにをしていたんだ？」

来ると思っていた質問だった。それはそうだ、女性一人をはぐれから助けて渡すのに普通あんな状態にはならない。

「勝負・・・かな」

シルは一番適当かと思われる単語を自分の頭の中にある辞書から引き抜いて言う。

ラウルの表情は微妙なものになった。

「勝負？なんでそんなことを？」

それはシルにも分からなかった。彼女が何故勝負を挑ませたのか、まったく見当がつかない。

それに関しては「強い奴を探してたんだ」という適当なことを言っただけだった。

「シル、手すごい怪我、早く手当てしないと」

そういったのは心配そうな面持ちでついてきていたアイリだった。

その言葉を聞いて改めて自分の掌の状況を見る。

「うわ・・・」

掌には縦横無尽に切り傷が走り、まだ固まっていない血でべたべただった。意識すると尋常じゃない痛みに涙すら浮かびそうになる。

「早く帰ろう、俺たちもこの町を出ないといけないし」

ラウルの言葉に、全員がうなづいた。

そして彼らは、陽の宿に戻ってきた。  
時計の針はすでに九時を回っていた。

シルは今アイリに傷の手当てをしてもらっているところだった。消毒を済ませた手に包帯をぐるぐると巻いていく。

シルの目には涙がたまっていた。理由は消毒の激痛に耐えかねたからである。

あいにく、この辺にヒーリングを使える人はいないようなので、次の町に行くまで右手には使用制限がかけられた。

「しかしアイリは手当てが上手いな」

シルの純粹で無垢なほめ言葉に彼女は少し照れたそぶりを見せる。

少し頬を染めたままで彼女は言う。

「一人旅立ったから・・・怪我也多かつたし・・・」

それは彼に手当ての上手い理由を納得させるとともに、彼女のこれまでの苦勞を語っていた。それに対してシルは気の利いた言葉をかけることができなかった。

「そっか・・・」

他人行儀な返答になり、語彙力に乏しい自分を心の中で罵った。

アネルカも目が覚め、今は少し遅い朝食の準備をしている。

「ありがとう、シル、ほんとに助かった」

「気にすること無いよ、まあ宿代タダとかでもいいけど」

言っていると、ラウルにまた小突かれた。

「冗談だろー！」

頬を膨らましながらか冗談の分からない堅物に文句をたれる。

それを見てくすくすと笑っているのはアネルカだ。

出来上がった料理をラウルと女子二人は部屋に持っていった。シルは未だ一階にいる、と言うのも、彼の利き手である右手は使い物に

ならないので、アネルカがシルの食事を手伝う役を買ってくれたのだ。

「じゃあはい、あーん」

そういつて料理をシルの口元まで運んでくる。

「え、食べるのを手伝うってそういう感じに？」

「ほかにどうするの？」

「まあ、そうだけど・・・」

嫌がるのも相手に失礼なので、ここはされるがままにしておく。彼女は再び「はい、あーん」と仕切りなおしてきた。

シルも若干照れながら料理を頼張る。

「おいしい？」

と彼女は尋ねてきた。ここはひらがなで書くのが打倒、と言うような感じだった。その子供っぽい感じの尋ね方と、覗き込んでくる顔を見て思わず目が泳ぐ、どこを見ていればいいのか皆目見当がつかない、若干遅れて「ああ、美味しいよ」と言う返事を返す。視線を逸らしながら。

彼女は「よかったあ」と相変わらず無邪気な笑顔で笑っていた。

彼は再び運ばれてくる二口目を頼張った。

(ここにとどまっても良いかもしれない)

そんな馬鹿なことも考えていたが、そういうわけにもいかないのであった。

「さて、そろそろ出ようか」

宿の前でラウルが言う、その手は金貨入れをこそそと漁っていた。革でできた袋から金貨を三枚取り出し、アネルカに渡す、しかし、アネルカはすぐには受け取らず、首を振った。

「あなたたちは私の恩人だもの、うけとれないよ」

「いや、でも・・・」

ラウルが尻込みしているところにシルが後から文字通り首を突っ込んだ。

ラウルの身体を押しつけ、アネルカの正面に割り込む。

「何言ってるんだよ、それはそれ、これはこれだ」

そういつて金貨をアネルカの白い手の中に押し込む。まだ少し申し訳なさそうにしていたが、もう断ることも無かった。

「またきてね」

「ああ、当然！」

シルとアネルカがもう一度約束を交わし、四人はアネルカに見送られながら、ポーラの町を南に歩いていった。

彼女も名残惜しそうに彼らの背中を見ていた。

「それはそうと、後二日ユリーク街道を歩かないといけないぞ」

そのラウルの通告にシルは露骨にいやな顔をして見せた。

「うええまじかよ・・・」

そんなに大きくない町なので、すぐに南の方へと伸びる街道が見えてきた。もう見飽きてしまったタング平原も延々と続いている。エルゼイラにつくまでには後二日歩かなければならない。

その間には町が無いので、一泊は野宿をすることになる。

再び長い距離を歩き始めたわけだが、シルの脳裏からあの時の赤髪の女性のことが離れることは無かった。

同刻、某所

暗い石造りの建物、その石でできた廊下を歩く一人の人物、女性らしい胸のふくらみと長い赤髪、露出のほとんど無い服を着込んだ女は木でできた古臭い扉を開けた。

「帰ったか・・・」

聞こえてきたのは低い男の声、のどの奥から出るような低い声が空気を震わす。

女は威圧感すら覚えるその声にも動じず、声のほうに視線を放る、そこには大柄でがっしりとした体格の男・・・いや、正確にはその男は人間ではない、その頭は人間のような肌ではなく、黒い毛に覆われ、顔の形は犬のような形をしている、さらに視線を下に下げると手が見える、その手も同じように黒い毛に覆われ、爪は鋭く、長い。足は長いズボンに隠れて様子は分からない、そしてもう一つ、人間とはまったく異なる部分がある、腰の辺りからだらりとたれている狼の尾。彼は人と狼が合わさったような姿をしている。

彼も列記とした召喚獣である。広く「亜人」と呼ばれる種族で、きほんは人型で、何かしらの獣の特徴を持っている。ここにいる男は狼の亜人、人狼や狼男と言えはわかりやすいだろうか。

その人とはかけ離れた容姿を見ながら女は言う。

「ああ、うるさい糞爺の説教を受けてきたところさ」

彼女はその場にいない誰かの悪態をつく、目の前の人狼は誰の事を言っているのか分かっていいるらしく、大口を開け、その鋭い牙をあらわにしながら笑う。

「ハツハツハ！お前は本当にアイツが嫌いだな」

「ふん、それより、次の仕事だ」

彼女は部屋においてあった剣を取りながら人狼に言う。

「次はエルゼイラだ、お前も来い。かならず例の金髪の小娘を捕ら

えろとさ」

「ああ、分かった・・・フレイヤ」

また低い声が響いた。

二人は手早く支度を済ませ、その部屋を出た。再び石造りの廊下を歩いていく。そんな二人の前から一人の男が歩いてくる。

黒いスーツに身を包み、シルクハットを深くかぶり、手にはステッキを持っている、その貴族らしき男は二人の前で立ち止まった。

「おや、これはこれは、フレイヤさんとお供の“わんこ”ではありませんか」

その男はシルクハットを人差し指でクイと上げながら二人に言う。

「出たな胸糞悪いひげ・・・」

『わんこ』と言われた人狼が悪態をつきながら、のどを鳴らす。おまけに牙まで剥いているところを見ると、そうとうこの男の事が嫌いらしい。

しかし、男はそんなことは気に留めず、軽い口調で続ける。

「あ、今この髭を侮辱しましたね、まったく賤のなっていない犬です」

その言葉に人狼はさらにうなり声を大きくする。

「だまれ！その髭食い千切ってやる！」

廊下に低い声が反響する。

まさに噛み付きそうな勢いで言う人狼をフレイヤと呼ばれていた女が制止する。

「やめとけ、まずいぞ」

しかし制止の言葉にも卑下の言葉が含まれている。

「で、なんのようだ？」

女は続けて言った。

それを聞いた男は変わらない様子で言う。

「ああ、お二人がエルゼイラに行くのならついでに連れて行ってもらおうと思ひまして」

「勝手にしな」

フレイヤは肩にかかった髪を払いながらそっけなく応える。男はさっさと歩いていく彼女らの後ろに数歩分間隔をあけて歩いている。

長い廊下を抜け、重々しい扉を開けると、外から日光が差し込んでくる。後からついてきていた男は何をしたのか、手に持っていたステッキを日傘に変えていた。傘が差し込む日光をさえぎり、白い男の肌をさらに青白く見せていた。

石造りの建物を出ると、その前は大きく開けていた。何かの施設のようだが・・・

「さて、ちょっと待ってな」

フレイヤは服のポケットからチョークを取り出すと、地面に円を書き始めた。

ただの円だったそれは徐々に複雑になっていく。

方膝を立てて陣を描くフレイヤのスカートのスリットから太ももが露出しているが、この場にいるものは一人もそれに注意を注ぐことは無かった。

男が、フレイヤの白い肌を気遣ったのか、日傘で影を作ったが、「邪魔だ」と一蹴。男は膨れっ面でフレイヤに背を向けた。

少し経ってから何も言わずにフレイヤが立ち上がった。肩にかかっていた赤い髪がするりと流れ落ちる。

「いくぞ・・・」

彼女は小さく呟き、足を肩幅に開いて構えなおす。

そして左手を魔法陣に向かってかざし、呪文を唱え始める。

『太古の契約の下、幻界との扉を開く、その姿をもって我が力となれ。来い、グラム』

詠唱が終ると先ほど書いた魔法陣が赤い光を放ち始める。そして、その魔法陣の中から巨大な頭が現われた。そしてそれはヘビのよう



にうねりながら上空へ上って行く。

へビのような首と巨大な翼、大木のような足、先端に向かうにつれて細く、しなやかになる尾。

黒い鱗は日光を反射して一枚一枚が黒曜石のようにきらきらと輝いている。

それは上空で巨大な咆哮を一つ上げるとフレイヤの目の前に下り立った。

地震のような地響きを起こしながら下り立ったその翼竜を見て男は拍手を送っていた。

「おみごと」

「そりゃどーも」

参賞の言葉だが、フレイヤは大して嬉しくもなさそうに応える。それは男の言葉が幾分か棒読みだったためだろうか。

「さて・・・とさつさと乗りな、あんたは・・・こいつの口でいいかい？」

男に向かって冗談を投げる。フレイヤの言葉で、人狼はすでにドラゴンの巨体に駆け上がっていた。その背中には巨大な鞍が装備してある。

「口は遠慮しておきます。閉所恐怖症なのでね」

「よく言っ」

乗れ、と、あごで示すと、その男も龍の背にひよいひよいと登っていく。フレイヤも背に乗り、龍の右側に両足を下ろし、足を組んでいる。

「いくぞ、グラム」

声を掛けるとその龍はゆっくりと頷き、パキパキと音を立てながら巨大な翼を広げた。

そして、一気に翼を振り下ろす。その巨体は一気に上空へと舞い上がり、その影はあっという間に鳥のように小さくなった。

「さて、もう見えてきたぞ、あそこが今日俺達がキャンプを張る場所だ」

所変わって、シルたち一行、歩きに歩いてようやくキャンプ場までたどり着いた。と言っても疲労の色を見せているのはシルのみだったが。

「やっとついた・・・」

すでにげっそりしているシルにラウルが投げ掛けた言葉は励ましの言葉とは程遠い現実だった。

「エルゼイラまであと一日だな」

「もうむり!!」

「もうムリ・・・死ぬ・・・」

シルの言葉とほぼ同時に聞こえてきた言葉、そのほうを四人は見た。そこは草原の中でも木が密集している、キャンプ場になっている場所。林の中を通る街道はキャンプ場の部分が広くなっている。

そんなキャンプ場のど真ん中で一人の男が倒れている。

「大丈夫ですか!?!」

ラウルがすぐに駆け寄って身体を起こす。

髪は短い茶髪で、身長はシルたちよりもかなり高い、あごひげには大雑把な手入れが施してあった。

どうやら旅の途中で力尽きたようだ。

こんな時に役立つのはラウルの的確な判断と指示である。

「アイリとレイの二人はその人を見ていてくれ、俺とシルですぐにテントを張る」

女子二人は短い目配せの後、すぐに頷いた。

シルは「俺もかよ・・・俺もぶったおれるよ?」なんてぼやきながらしぶしぶ準備に取り掛かった。

テントを張るといっても、そんなに時間のかかる作業ではない。キャンプ場にはすでにいくつかの木が組まれた状態でおいてある。それにテントの屋根を張ればいいだけなのだ。

すぐにテントは完成した。横から見ると直角三角形をしていて、テントの中は奥に行くほど天井が低くなっているが、そこまで狭くはない。屋根は水を弾く毛皮を使っているので雨漏りの心配もない。日も落ち始めていたため、その男をテントの中に運び込む。

シルとラウルが女子のためにもう一つのテントを張っているとき、男は目を覚ました。

ゆっくりと開く目を覗き込むようにしてアイリが声を掛ける。

「大丈夫ですか？」

少しの間男はアイリの顔を見つめて口を開いた。

「・・・俺は死んだのか・・・」

「はい？」

突然の言葉にアイリは思わず素っ頓狂な声を出してしまった。しかしその男の寝言のような台詞は終わらない。

「あー、死んじまったのかあ・・・まさかこの歳で天使に迎えにこられるとわな・・・残念というか、喜ばしいというか・・・」

どうやら、アイリを迎えに上がった天使だと思っているらしい。

今アイリは白い服を着ている。さらっとした金髪と、その白い服を見れば、そう見えなくもないかもしれない。

「おーい、起きたか？おっさん」

シルがテントを張り終えて横からひよっこりと顔を出した。

「お、おっさん起きてるじゃねーか、よかったよかった」

「・・・ん？」

「はあ！？アイリを天使だと思った？」

「いやーあんまり可愛かったんでな」

今、その男とシルを含める四人はキャンプ場で焚き火を囲んでいる。男は大声で笑いながら頭をかいているが、アイリを除く三人は呆れ顔を男に向けている。アイリだけが少し頬を染めていた。間接的にだが、自分を天使といわれたからだろう、どうやらアイリはこの手の言葉に耐性がないらしい。

「ところであなたの名前は？」

シルが相変わらず礼儀の欠片もない喋り方で話題を転換させる。

「俺はハルク、ハルク・クリフオードだ」

それを聞いてシルたちは同じ事を考えた。

苗字、この世界では姓というのは特別な意味を持つ。それはつまり、貴族の印。

選ばれた、特別な人間、そんな人たちに姓が与えられるのだ。

「おっさん貴族だったんだな」

貴族と知ってなお口調の変化しないシルにラウルは焦りを覚える。

フォローしようかとも思ったが、どうやらその必要は無かった。

男、ハルクが先に口を開いたからだ。

「よしてくれ、貴族なんて、俺はそんな柄じゃない」

眉をしかめて言うその言葉はあながち謙遜というわけでも無さそうだったが、初対面のシルたちには理由なんてわからなかった。

「それで、あなたは どうしてこんなところに？」

ラウルの言葉にはそのままの意味ともう一つ「どうして倒れていたのか」という疑問も含まれていた。そして、当のハルクもその意を汲み取つたらしい。

「ああ、ちよつとこのあたりを見回っていたんだがな、腹が減ってぶっ倒れたというわけだ」

「腹が減ってって・・・」

シルたちが揃って呆れ顔を向ける。

アイリが焼けたパンにバターを塗ってハルクに手渡す。

一言礼をしてそのパンを受け取ると、すぐに頬張った。

「ところで、ハルクさんは どうして見回りを？仕事ですか？」

尋ねたのはレイだった。

「うむ、あながち間違いでないが、少し違うな、俺は街の自警団に入っているんだ」

もごもごとパンを頬張りながらハルクが言う。

そのまま口を動かしながら言葉も続けた。

「最近この近くで怪しい動きをしている連中がいるらしい」

「怪しい、とは？」

ラウルの質問を聞いて、ハルクはぐいっと口の中のものを飲み込んだ。

「ああ、なにやらかきまわっているというか、人を探しているらしい」

四人には当然、心当たりがあった。多分、それは十中八九、この場にいる一人の少女のことだと・・・

「もう少し、詳しくわかりませんか？」

探りを入れるラウルにハルクが怪訝な顔を示す。

（しまった、探りを入れるべきじゃなかったか、もしかしたら怪しまれたかも・・・）

などと考えていたが、どうやらそれは杞憂におわった。しかしそれは四人も予期していない方向からのものだったが。

「あ！それは！」

突然の大声にレイとアイリの肩がすくむ、ラウルは思わず手を腰の短剣にかざしていた。

「どうしたんだよ？」

シルが問う、なぜならさっきの彼の言葉はシルに向けられたものだったからだ。いや、正しくは知るが持っていた槌、それに向けられたものだった。

「それはラングドウシヤのベルガン爺さんの槌じゃねーか！」

「おっさん、知り合いなのか？」

シルが目を丸くしながら聞いた。他の三人も驚きを隠せないようだ。  
「ああ、知っているも何も、その槌は俺が数年前に預かって旅をしていたときのもんだ」

「え！？じゃ、じゃあハルクさんがベルガンさんが話していた男の人？」

レイが驚きながら確認を取る。ハルクは黙って大きく頷いた。

「懐かしいな、ちょっと見せてくれ」

「ほい」

ハルクはその槌を受け取り、まじまじと懐かしそうに見つめていた。そして、少し経ってから、槌をシルに返ししながら語りだした。

「いや、さつきは少し君達を疑っていたんだ」

彼の告白にレイとラウルがびくつと反応する。

「しかし、どうやら杞憂という奴だったらしい。あのベルガンさんが悪さするような奴にこれを託すはずが無い」

「どうしてそう思うんだ？」

シルの言葉だったが、それは少し冷たくも聞こえた。

「必要ない質問だったか、とも思ったが、聞いておきたかったのだ。」

「あの人の見る目は本物だ、十分確信に値する。そういう何十年もかけて培った能力は驚くような力を持っていると、俺は思ってる」  
自信に満ちた声、それに対してシルは、「ああ・・・そうだな」とだけ応えた。目の前でゆらゆらと揺れている炎を眺めながら呟いた。頭の中ではなんとなく、怠慢だった学校生活を思い出していた。いつも同じ時間を繰り返していた気がした。ふと時間が動き出す時もあるれば、大体が退屈な時間の塊。ラウルやレイとの付き合いも楽しくなかったとは言わない、むしろその逆で、唯一の楽しみだった。しかし、その会話の内容は次の日には幾年もたってしまったかのようには記憶の中から消えていた。

人生なんてそんなものだと思っていたが、どこかでそれを否定したい気持ちもあった。

だからこの旅にも付いてきたのかも知れない・・・

でもそれは、あの生活から逃げただけ、自分に能力が無いことが、才能が無いことが恨めしかったから・・・

「シル？」

シルを思考の海の中から引き上げたのはアイリの言葉だった。

シルはハツとしたように声のしたほうを向く。

アイリはシルの顔を覗き込むように眺めていた。

「どうしたの？」

不安そうなその声に、シルは急いで笑顔を取り繕った。その付け焼きの笑顔がどのようなものだったかは自分でもよくわからないが。

「ああ、なんでもない、ちょっと考え事してただけだ」

「どんな？」

「・・・旅について来て良かったと思っただけ」

アイリは不思議そうに首をかしげた。

「どうして？だってこんなに傷付いてるのに・・・」

そっぴいながらアイリはシルの手をふわりと両手で包み込んでいた。それが異性に対してどのような効果があるのかは・・・気付いていないようだ。

シルの居心地の悪そうな表情を見て自分がしていることに気がついて、たらしいアイリは慌ててその手を離れた。

「それで、おっさんはどうして旅をしていたんだ？」

少々強引な話題の転換だったが、今の気まずさと、先ほどの考えをとりあえず拭い去りたかった。

「・・・世界を・・・見てみたくてな」

「世界を？」

帰ってきた答えは彼らにはイメージしにくいものだった。皆それって首を傾げ、彼の話に聞き入った。

「俺は、まあそこそこの貴族でな、自分で言うなという話なんだが・・・ルールとか家の事情の中で生きていた。」

学校に行けばその厳しいルールに従い、家に帰るとそこでも厳しいマナーの指導だ。

そんな日を毎日過ごしていた。

そうするとそんな生活にも嫌気がさしてな、家出したわけだ。

いろんな所にいくうちに、人と触れ合うことの楽しさを覚えた。

見ず知らずの人ともたくさん話した。ちなみに、ベルガンの爺さんから槌を借りた理由はどうせ旅に出るならゼロからやってみようってなって、俺は服だけで他は何も持たずに家を出た。」

無言で聞いていた四人が最後の部分で一気に脱力した。

「・・・無謀すぎる」

ラウルの言葉だった。

「というより・・・無能？」

次は、レイ。

「はっはっは！まあ確かに準備に越したことは無い。お前さんたちのほうが賢い旅をしているのは間違いないな」

焚き火を囲む五人の笑い声が響いた。

あたりはすでに真っ暗になり、フクロウもどこかで鳴いている。

彼らの雑談はもうしばらくの間続いた。

火をけし、テントの中で眠っていたシルの目が覚めたのはまだ日の中では程遠い深夜だった。外を見ると、そこには月明かりに照らされている一人の少女がいた。

シルは重い体を押し上げ、起き上がった。

「起きてていいのか？」

後から声を掛けたが、あまり驚いているようでもなかった。気付いていたのだろうか。

「うん、ちょっとあまり眠れなくて」



「明日もまた歩かないといけないし、エルゼイラではアイリの親戚探しに走り回らなくちゃいけない。休んどいたほうがいいぞ？」

「うん、ありがとう・・・ごめんね」

アイリは少し疑問系のニュアンスで謝った。

「どうして謝るんだよ」

シルの質問は完全な疑問系。

「シルやみんなが大変な思いをするのって、全部私の所為だもの・・・明日からの事だって、本当なら私一人でやらなきゃいけないの・・・これからの旅もいつ魔導師たちに襲われるかわからないし・・・」

「

もういいよ」

シルがアイリの思考を途中で遮断させた。

「悪いことをぐるぐる考えてても、答えなんかでないよ、俺も、今日よくわかった。それに、言っただろ？後悔はしてないってさ、俺は旅に出たかったから一緒に来たんだ。もつと俺達のこと、頼ってくれていい。頼りないかもしてないけど、俺、力になるよ」

「ううん、すごく頼もしいよ、ありがとう。シル」

そのときのアイリの表情は確かに笑っていたけど、どこかそれだけじゃないような気がしていた。

もつとほかに何かあるような、違和感。

暗く見えたのは月明かりの所為だと、自分に言い聞かせた。

「アイリ、必ず親戚を見つけよう」

「・・・うん」

「約束な」

そう言ったとき、すでに自分の中からポロリと抜け落ちていた、アネルカとの約束を思い出した。

ここまで忘れっぱかったかと、自分自身を嘲笑し、頭をかいた。

「ねえ、シル・・・」

「なんだ？」

「・・・うつん、なんでもない」

シルは頭に「？」マークを浮かべ首を傾げる。

「一緒に来てくれて、ありがとう」

突然のお礼に、言葉を返すことが出来なかったが、月明かりに照らされている彼女の笑顔を見ると、返す言葉なんか必要ないような気がした。

シルはそう思い、一度だけ頷いた。

そして二人はもう一度、天空に浮かんでいる月を見上げた。

9 - 2 - エルゼイラへ - (後書き)

どうも、駄目な天使こと、駄天使です。

今回少し長いような気がします、気にしないでください・・・

後、投稿も前回からかなり間が空いてしまいました。すいません、

この辺の話がちょっと煮詰まっていたので(言い訳ですごめんなさい  
次からは投稿のペースも上がる ハズ です。

誤字や変な文があればコメント欄にて指摘ください修正します。

目を通して頂いた方、ありがとうございます。

暇で死にそうな時にでもこの小説のことを思い出してくださいれば幸いです。

9・3 エルゼイラへ（前書き）

前回から間が空いてますが、続きになっております。

翌日、シルの目を覚ましたのは眩い日差しだった。

もぞもぞとテントから這い出ると、すでにみんな起きているようだった。

昨晚、シルと同じ時間に布団にもぐったアイリもせつせと朝食の準備を手伝っている。

「シル、いつまで寝てるつもり？」

頭上から降ってきたのはレイの声だ。

「んあー・・・」

謎の声を発しながら再び眠りに着こうと自分の腕を枕代わりにする  
と、次に頭上から降ってきたのは、大量の水、滝のように流れ落ちる水  
の束はシルの頭を直撃した。

「ぶっ」

「起きた？」

「もう少しましな起こし方してくれ・・・」

などとぼやきながらアイリの差し出すタオルを受け取りながら礼を  
言う。犯人のレイの目の前では青い魔法陣が光の粒子になって消滅  
していく。

「こんなことに魔法使うなよ・・・」

顔をタオルで拭きながらレイに向かって無駄だとわかっている文句  
を垂れてみる。

「いつまでも起きないのが悪い」

案の定一蹴され、悲観的になりながらも朝食の準備を手伝うことに  
した。

朝食の準備も整い、全員が集まった。

「たくさん食べとけよ、これから一日中歩くんだから」

ラウルがみんなに呼びかけるとシルが深く長いため息を吐いた。

それを見たラウルやハルクはクツクと笑った。少女二人も顔を見合わせて笑っている。

朝食が終ると、みんなでテントの片付けを始める。

こういう作業は魔法で行うことは出来ないのが、つらいところというか、なんと言うか。

あくまで、幻界で起こる現象を魔法陣から引き出しているだけなので、万能なわけでは、もちろん無い。

「はあくだるいなあ」

やる気の無さと気だるさを前面に出しているのは、やはり、というべきか、シルであった。

テントの屋根をだらだらと外しながらばやいている。その向かい側ではラウルが「そんなこと言っても仕方がないだろ」といつものようにたしなめている。

「そうなんだけどな」

と言いつつも未だ不満げな表情の彼だったが・・・

五つ折にした布をくるくると巻いていく。これを片付ければキャンブの片付けは全て終了だ。

「さて、早速出発するわけだけど・・・」

と、ラウルが中途半端に口ごもる、何かあるのか？とシルが聞きかけた時、先にラウルの言葉が発された。

「ハルクさんはこれからどうするんです？」

それを聞いて納得したようにシルとアイリ、そしてレイがハルクのほうに視線を投げた。

彼はほんの少し考えるそぶりを見せた後で言う。

「よし、俺も一緒に行こう。もう用事も無いしな」

「わかりました。行きましょう」

ラウルが一度頷いてから応えた。

そして五人は再びユリーク街道を歩き始めた。

歩いているうちに、朝の冷たい空気も少しずつ薄れてきた。だんだんと暑くなるにつれて、皆の足取りが重くなる。

「少し休むか？」

これからさらに暑くなって体力を削られることを危惧したラウルの言葉だった。

「いや、俺は大丈夫だ」

そう答えたのは以外にもシルだった。珍しくここまで何の文句も言わずに、黙々と四人の前を歩いてきていた。

おそらく昨晚の会話が原因なのだろうと、アイリはおおよそ勘付いてはいたが、もちろん口には出さなかった。そしてその事實は周りのメンバーには知る由も無かった。

「わかった、だけど少しペースを落とそう。エルゼイラに着くまでにばてるぞ？」

「・・・そうだな、わかったよ」

頷きながらシルは応えたが、実のところ、シルは自分の歩くペースが速くなっていることに気付いていなかった。

ラウルに言われてはじめて気付き、ペースを落とすとした。

「どうかしたの？シル、昨日とは歩くペースが全然違うけど」

レイにそういわれてギクリとしたシルだったが、表情には出さずに応える。

「そうか？なんか今日は調子がいいんだよ」

本当のことを言うとそんなことはまったく無いのだが、昨晚のことを言うのはなんとなく照れくさくて、ごまかした。

案の定レイはそれ以上の詮索をしなかった。そこまで勘が鋭い人間ではなくて良かったと、シルは内心で安心した。

あまり鋭くなく警戒心もゆるいレイだからこそシルは普通に彼女と接することが出来てきたのかもしれない。

「シル？どうしたの？急に黙り込んで」

レイの言葉にハッと我に帰る。とっさに「いや、なんでもない」とごく普通に切り返しをして、レイから目を逸らす。そのとき彼女の

頬が少し赤らんでいたが、シルはおそらく気付いていないだろう。そんな光景を昔から一步引いたところでみているラウルとしてはシルの鈍感さを何とかしたいのだが・・・

その頃、途中で一向に拾われたハルクはアイリと会話に花を咲かせていた・・・と言う表現はあまりふさわしくなく、二人の会話は花と言うには暗すぎる内容だった。

「ほう、それで旅を・・・」

ハルクは興味深げに指で自分のあごひげをなぞった。

「はい、多分どこかの派閥の一派だと思っんですが・・・詳しいことは何も・・・」

「ふむ、そいつらに狙われることに心当たりは？」

アイリは無言で首を左右に振った。

「・・・そうか」

それっきり二人の会話は途切れた。

それからしばらく歩き、ポーラとエルゼイラを結ぶ街道を三分のほど歩いたところだった。

「！！！」

突如として響く悲鳴、三人はちょうど小高くなっている丘を登っているところだった。悲鳴はその丘を越えた辺りから聞こえてきた。顔を見合わせた五人は丘を登る足を速めた。

丘の上まで来たところで、一人の初老の男が走ってきて、シルたちの前で膝をと手を地面に突いた、ラウルがすぐに傍によって声を掛ける。

「どうしたんですか!？」

「あ、あんたたち・・・自警団か?! たのむ、わしの馬車を守ってくれ!」

「わかった、俺が行こう」

ハルクが丘の下のほうにある馬車を見つけ、すぐさま走り出す。



「ハルクさん、俺も！」

「駄目だ！ここに居る！」

力強く制止して、ハルクは勢い良く丘を駆け下りて行った。その右手には腰の鞘から引き抜かれた一メートルほどの刀身の剣が握られていた。

荷馬車を襲っていたのは巨大な召喚獣だった。するどい眼光に、先端が鋭く曲がった嘴、足も人の腕ほどの太さがあり、その鋭利な爪はハルクに狙いを定めている。

さらにその翼は召喚獣自身の身体よりも一回り以上大きく見える。その巨大な鷹のような召喚獣は荷馬車の中身をついばんでいたが、ハルクが近寄ると巨大な翼を羽ばたかせて宙に浮き、臨戦態勢に入った。

ハルクが召喚獣と対峙する。

相手はすぐに上空からハルクの頭めがけて踊りかかった。鋭い爪がハルクに襲い掛かる。ハルクはそれを剣で逸らしてかわす。肩透かしを食らった巨鳥は一度地面に降り立ち、すぐさま飛び上がる。

上空まで上がり旋回しつつ再び狙いをハルクに向ける。

巨鳥は鋭い嘴をハルクに向け、急降下する。

ハルクは剣の持ち方を直して体の前に構える。

召喚獣との距離は物凄い勢いで詰まっていく。

遅い来る巨大な鳥を、ハルクは斬った。ハルクの握っていた剣は敵の羽の付け根を捉え、真っ直ぐに切り裂いた。

切断、とまでは行かないまでも、巨鳥は相当なダメージを負ったらしく、地面に付し、のたうっている。

その光景を見据えるハルクの後からラウルが歩み寄ってきた。

「強いですね、ハルクさん、さすが自警団に所属しているだけあります」

ラウルの素直な賞賛だが、ハルクからのリアクションは無い。

「ハルクさん？」

違和感を覚えたラウルがもう一度声を掛ける。しかしそれにも反応

は無く、ハルクは黙って未だにもがいている召喚獣の傍へと歩いていく。

その手にはまだ血の滴っている剣が握られていた。

「ハルクさんっ」

ラウルはハルクの肩を掴む。

「何をするつもりですか？」

「離れてる・・・血がかかるぞ」

ハルクから返ってきた言葉は彼が何をしようとしているのかを語っていた。そして、彼の言葉には今までのような抑揚は無い。

「もう十分じゃないですか、これ以上何を・・・」

ラウルの言葉を最後まで聞かず、その言葉から目を逸らすように召喚獣に向き直ると、剣を召喚獣の喉に突き立てた。そして、そのまま真っ直ぐに切り下ろした。

鮮血が飛び散り、ハルクの着ていた衣服を赤く染めていく。

「・・・なにも止めまで刺さなくても」

ラウルの目には非難の色が浮かんでいた。

ハルクは目を合わせることなく呟く。

「これが自警団の仕事だ・・・俺だって、好きでやってるわけじゃない」

「でも・・・」

反論しかけたラウルの言葉が途切れたのは、シルに肩を掴む形で制止させられたからだだった。

「やめとけ、そんなこと言ったってしょうがないだろ」

「おまえまで・・・」

「人に害を与えるものは駆除されてもしょうがないだろ・・・たとえ相手にどんな意思があってもな。世の中きれいごとばかりじゃ渡っていけないぞ。」

「シル・・・お前は納得できるのかよ？」

親友から放たれたあまりにも冷たすぎる言葉につい口調が鋭くなる。「納得するしかないだろ、これが正解だって自分の中で正当化しな

いと・・・気が狂いそうになる」

そこでラウルはようやく、シルが数日前の黒魔導師達のことを言っているのだと気付く。今まで違和感が無さ過ぎて気付かなかった。いや、シルの方が気を使って気丈に振舞っていたのだろう。

状況は違えど、奪った命の重さは変わらない。

「すまない、俺がもつと強い意志を持つていれば自警団の掟なんて怖くなかったんだろうがな」

「いえ、気にすること有りませんよ、それより、すみません、ハルクさんの苦悩も考えず口を挟んでしまつて」

ハルクは一度軽く首を縦に振つた。

「いやー、それにしても助かつたよ、君達、ありがとう」

馬車の持ち主の男がレイとアイリと一緒に丘から下りて来た。

「いえ、怪我が無くてよかつたです」

ラウルが言つ。

「ところであなた達はこれからどこに行くんだい？」

シルとラウルは顔を見合わせる。

「エルゼイラへ行く予定です」

答えたのはラウルだった。

男性は少し考えた後数回頷いた。

「そうか、そうか、わしもエルゼイラへ荷を運んでおつたのじゃ、先の礼・・・と言つては何じゃが、荷馬車に載せてやるう、礼はそれと積荷の一部で許してくれ、なにぶん、金が無くてな」

「いえ、十分ですよ」

再びラウルが言い、五人は男性の馬車に乗せてもらう事になった。

「おっさんは何を運んでるんだ？」

シルの質問は相変わらず相手が年上でも軸がぶれない。ほめ言葉にはならないが……

「干し肉をな……」

男は荷馬車の後ろを親指で示した。そこには樽がいくつも並んでいる。

「売り物？」

「ああ、エルゼイラで売るんじゃない」

頷きながら告げる男性の肩をシルがつつく。

「一つください」

と、視線を向ける男に銀貨を一枚出す。シルの向ける無邪気な笑顔に男性もつい口元がほころぶ。

樽を空け、干し肉を一枚取り出し、シルに渡す。

早速肉を頬張りながら、シルは少しの間男性と会話を続けていた。

一方で、ラウルとハルクはなにやら暗いムードを漂わせている。

「ほかにやり方はないんですかね？」

「……俺にはわからない」

ハルクの表情は曇っている。ラウルも景気のいい顔はしていない。

「召還獣なら送還できるんじゃないんですか？」

送還は、文字通り、召還の逆で、召還獣を幻界へ送り返す行為のことだ。しかし、それにはこの後ハルクが言うような問題があった。

「送還は召還と同じときの魔方陣を描かなくてはならない……あの大きさの召還獣ならそれはかなり複雑なものだろう、それを探するのは……」

ハルクは最後まで言葉をつなげなかったが、ラウルは彼が言わんとすることを察した。

「・・・そうですね・・・でも、やりきれないんじゃないんですか？ハルクさん」

「・・・ああ」

ハルクは虚空をただ眺めながら頷く。  
少し間を置いてから言葉をつないだ。

「あわよくば若者たちに何とかしてもらいたいものだ」

その言葉はラウルたちに向けられたものだ、ラウル自身は捕らえたが、なんとなく、別の人のことを言っているようにも聞こえた。

「・・・そうだ、今のうちに君たちに言っておかないといけないことがあったんだ」

さつきとは一変して、明るい口調と表情で、四人に声をかける。

四人の視線がハルクに向けられた。

「なんですか？それ」

質問の発言者はラウル。それにハルクは頷きながら答える。

「うむ、宿とか諸々の話をな」

四人の反応は、ああ、なるほど。と一貫したものだだった。

「まず、宿だが、エルゼイラに着いたらまず、中央の大通りをまっすぐ南に行け、町の中央を一直線に貫く道だ。町の真ん中でもう一本東西に走る大通りがあるから、そこにあたって左に曲がれずぐに『やどや』と気の抜けた看板が見えるから、そこに入れ、俺の紹介だといえば、断られることはないだろう」

と、ハルクは一息に説明した。

「えっと、大通りをまっすぐ行って左ですね、わかりました」

ラウルが確認を取りながら、頷く。

「・・・お前たちはいつまでこの町にいるつもりなんだ？」

少し考えた後、ハルクが質問する。

「長くて一月」

答えたのはシルだった。それに対してラウルが驚きの声を上げる。

「一月！？そんなに居座るのか!？」

レイも彼と同じ意見らしく、しきりに首を縦に振っている。

それに対して、シルが答える。

「そりゃそうだ。この大きな町から人一人探すんだろ？四人だとそのくらいかかるかもしれないし・・・いなかったら、まあしょうがないんだけど」

しょうがないでは済まないような気もするが、手探り状態での人探しなんてそんなものかと、ラウルも納得の意を示した。

必要になるのは時間と金か・・・と、そんなことをシルは心の中でつぶやいていた。

「と、言うわけでハルクさん、長くて一月です。彼女の親戚が見つければ、すぐに行きますけどね」

ここで言う彼女は言うまでもなくアイリだ。

「うん、わかった。町にいる間、俺は自警団のところにいるから、いつでも尋ねてきてくれてかまわない。場所はこれから行く北門の西側だ」

「ありがとうございます。何かあればお願いします」

ラウルの言葉にハルクは「ああ、いつでもかまわんぞ」と答えた。

「着いたぞ」

それぞれの会話に花を咲かせていた面子は男のその言葉でいったん話を切った。

前を向くと、そこには巨大な壁が聳え立っていた。

「おお・・・」

「でけえ・・・」

「すご・・・」

思い思いの感想をつぶやきながら、目の前の大壁を見上げる。

シルたちのいたラングドウシヤも決して小さな町ではない、むしろここら辺では大きな町だが、このエルゼイラは規模が違っている。

それがこの門一つを見ただけで見て取れる。

巨大な壁にぽっかりと穴があいていて、取り付けられた門は開け放

してある。その木製の門も、いったい何人掛かりで開け閉めしているのか、見当もつかない。

その中を馬車が何台も行き来している。

その中に、一行も向かっていく。

門を通り抜け、商人の男性に別れを告げた彼らは大通りの手前の広場に集まっていた。

「じゃあ、俺はこっちだから、場所は大丈夫だよな？」

ハルクは四人にしばしの別れを告げながら、念を押した。

ラウルは「大丈夫ですよ」と笑って答える。

「お勤めがんばってください」というアイリの言葉に顔を綻ばせながら、（にやけながら、とも言う）その場を後にした。

「じゃあ、俺たちも行くか」

「そだな」

改めて町を見ても、その光景は圧巻だった。

日はもうすぐ落ちるはずなのだが、まったく暗くない。むしろ町の中心部は明々としていて、眩しいくらいだ。

「すごいね」

「うん、こんなの初めて・・・きれい・・・」

レイとアイリが話している。やはりこういう光景は感動的に見えるらしい。

シルはと言えば、あたりに大量にある出店に眼を輝かせたり、すれ違う女性を視線で追いかけてラウルに小突かれたりしている。

「とりあえず、まずは宿だ」

「へいへい」

シルは、早速買ったパンを頬張りながら適当に返事を返す。

「まったく、もう日も暮れるんだから、早く宿に・・・」

言葉を続けようとするラウルの台詞を遮ったのはアイリだった。

「ちよ、ちよっとまって」

あわて気味にそう言うとはばたと出店のほうにかけて行ってしま

った。レイもアイリの後を追いかけるように走っていった。

その光景を見たラウルは腰に手を当て、一つ、深い息をつくのであった。

「急ぐことねーんじゃねーの？ ゆっくりでも、いつか見つかるだろう・・・それまで、少しでも長く一緒にいたい・・・じゃん？」

最後はなぜか疑問系になっているが、ラウルはシルにしては珍しい物言いに驚かされた。普段なら、適当なことを言っただけ、自分の本音を隠しているのでは、ストレートに感情を出すことは少ない彼である。

「以外だな・・・」

「は？」

周りの騒音のせいかな否か、聞き返してきたシルには同じことは言わず、少しからかってみる。

「ツンデレってやつか？」

「だ、だれが！」

どうやらさっきの発言のことを言っているのはわかっているらしいいや、会話や言葉遊びの好きなシルがそれが分からない訳がないのだが・・・。

赤くなつて反論するシルを尻目に言う。

「そうだな・・・ゆっくり行こう」

そうこうしているうちに二人が帰ってきた。二人が抱えている袋にはパンと果物が入っていた。

（まさかこんなに買つとは・・・）

と、ラウルの誤算も完全に気にも留められず。彼らは宿を目指す。



「これか？」

シルの声、門から一刻以上もかかったところにあつたのは、看板に確かに「やどや」と気の抜けた字で書いてある木造の建物だった。とりあえず、シルがノックしてみる。

『はいはい』

なかからこれもまた気の抜けた返事が帰ってきた。

セシルにこんな返事をしたら締め上げられること必至だな、などと考えながら、ドアが開くのを待つ。

「はいはい」

ドアが開き、中から、身長の低い男・・・少年が姿を見せた。

「えつと・・・宿主さんいる？」

若干困惑しながら、シルがたずねる。少年は小首をかしげながら言う。

「宿主？それなら僕ですよ？」

「・・・いや、この宿主さんを・・・」

少年はさらに首を傾げる。

「僕がこの宿主さんですよ？リックといいます」

相変わらず覇気の感じられない口調で少年が言う。

「ええ！？」

「お泊りですか？」

驚愕するシルたちを尻目に、淡々と聞く少年。

「ええ、四人、泊まりで」

ラウルが言うと、少年は浮かない顔になった。

「申し訳ない、今日はもう予約で埋まってまして・・・」

ええ！？と、再び彼らが驚いたのは言うまでもない。ほかにあてがない以上ここで交渉するよりない。

「なんとかありませんかね？」

「無理ですね」

すぐに帰ってくるあつさりとした返答。

「そこをなんとか」

ラウルに続いてレイが頼み込む。

「駄目ですね」

だがいい結果はでない。

「どうしても無理なのでしょうか？」

「不可能ですね」

アイリも懇願するが、どうやら駄目らしい。

「ハルクの紹介で来たんだけど？」

「どーぞどーぞお入りください！」

四人がずっこける。

先ほどまでの交渉はなんだったのかと思うほどの変わりようだった。

「でも予約があるのでは？」

ラウルの疑問はもつともで、ほかの三人、いや、シルはそんな風に思ったかどうか疑わしい、が、少なくとも三人、ラウルと、レイと、アイリは思った。

自分たちのせいではかの客が以前から取っていた予約を取り下げられてしまうというのは、寝つきが悪い。

「すぐに断ります」

どうやら今晚の寝つきは悪そうだと、思うラウルたちだった。

「まあまあとりあえず上がってください」

案内されるがまま、宿の戸を潜る四人。

全員が未だ彼が宿主であることを疑っていた。

「さあさあさあさあ、どうぞ、どうぞ入ってください、そしていらっしやいませ、ここがこの町で一番の宿ですよ」

くるくると回り、広いロビーの中央で大げさな仕草で、両腕を広げながら言う、店主。と、思しき人。

「そうは見えないな」

間髪いれずに言葉を挟んだのはシルだった。

すぐにラウルがシルの爪先を踵で踏む、満面の笑みをたたえながら。「いやー、確かにいい宿ですね」

すかさず入るラウルのフオロー、しかし、ラウルの言葉はまったくの世辞だったわけではない。ぐるりと見渡しただけでも、隅々まで手入れが行き届いているのが分かる。

木造の建物の中の天井は高く、オレンジ色のやわらかい光を放つシヤンデリアが頭上にぶら下がっている。

「そうでしょう、そうでしょう、いい宿ですよ、ゆっくりしていただくさいな。ところで、もう夕刻ですが、食事はどうなさいます？」

傲慢な表情で何度も頷きながら少年が聞く。

「いえ、食事はいいです。取ってきましたので、先に部屋のほうにお願いします。二部屋貸してもらえますか？」

「はいはいかしこまりました」

先ほどまであれほど頑なに断っていたのが嘘のように事が運び、話が進む。

四人の先頭に立ち、少年が彼らを案内する。

彼はハルクに弱みでも握られているのだろうか？そう思わずにはいられないシルであった。

案内された部屋は、比較するのも悪いのだが、ポーラの宿よりも、いくらか広かった。

「広いなあ・・・」

そう呟いたラウルもおそらくポーラの宿と比べていたのだろう。

「俺もう寝るわ・・・」

大きなあくびをしながらシルがラウルに告げる。

「風呂は？」

ラウルはあきれた様な眼差しで、腰に手を当てながら、すでに布団の上につっ倒れているシルを見やった。

シルは黙って手を振っている。

「やれやれ、朝になったら行つとけよ？」  
シルの振っていた手の動きが止まり、ぱたりと取れたのを流し見ながら、ラウルは部屋を出た。  
その後、ラウルやアイリたちが何をしていたのか、もしくは何もしてなかったのか。彼は知らない。

翌日。予定通り、シルは入浴していた。

そんなに長い時間は取れないのでさっさと上がると、不意にドアが開いた。

「シル？居るの？」  
レイだった。

その声を即座にレイだと、姿を見ることなく確信したシルはあわてて上半身裸で下はズボンを履いただけの状態で背中を木造りのロッカーに預けた。

「な、なんだよ・・・レイか、ここ男湯だぞ？ノックぐらいしろよな」

そういうシルの額には汗が滲んでいた。

「ご、ごめん、まさかほんとに居るとは思わなくて・・・」

ドアで顔を隠しながら話しているので表情はまったく分からないが、おそらく真っ赤な顔をしているのだろう。

「いや、まあ・・・なんだ。気にしてない」

服を着終えて、居住いを整えながら言う。

ドアの向こうからは「う、うん」という歯切れの悪い返事が返ってきた。

「で、何しにきたんだ？」

ドアに隠れるレイを覗き込むと彼女はあわてて視線をそらせた。

「えと・・・呼びにきたの、シルを・・・ラウルが、今日の予定話すからって・・・」

「なるほど」

動揺のせいかわ、話し方が倒置法になっているが、気にせず答えた。

「いくぞ」とまだ気恥ずかしそうにしているレイの手を引いて行く。

廊下の途中でシルが急に立ち止まった。

引っ張られていたレイはシルの背中に思い切り鼻をぶつけてしまった。

「もう！なにふんのよ！」

どうやらもういつもの彼女の調子に戻っているらしい。

転換の早いやつだ、と、感心しながら、今思い出しとことをレイに聞いておく。

「なあレイ、さっき脱衣所でなんか見たか？」

そういうとレイは再び顔を赤くして目をそらす。

「な、なんでそれを蒸し返すのよ！！・・・急だったから、何も見てないわよ」

不機嫌そうな表情をしているが、シルはそれが照れ隠しだと知っている。

「そうか」

あっさりとそう答えて、部屋に戻った。

部屋ではラウルとアイリが二人でしゃべっていた。部屋の大きな窓の際に置かれた長方形の長テーブルでラウルとアイリが話していた。テーブルには朝食がずらりと並べてあった。

こちらに気づいたラウルが「お、シル、戻ったか」といって、シルの分の椅子を引いた。

とりあえずシルがそこに腰を下ろすと、その隣にアイリ、その向こうにはレイ。

結果的には右から、ラウル、シル、アイリ、レイの順で座った。ラウルとレイは向き合う形になっていて、シルとアイリは隣同士になっている。

それなりに間隔はあるので、意識することも、特にない。いや、特にというとかありそうなので、ここは「ない」と断言しておこう。と、心中で一人呟くシルは、表面だけを見ると、うんうん、と一人で頷いている、一言で言うと、変な奴だった。

アイリは不思議そうな顔で隣の男を見ていたが、ほか二人は、まっ

たく意に介していないようだ。

「で、今日の予定なんだけど、どうしようか」

ラウルにしては茫漠とした・・・とうか、単純・・・いや、適當すぎる話始めだった。いつもなら、大体の流れを作ってから、それにみんなの意見を取り入れていく。というやり方なのだが、これでは最初の『流れ』が無いに等しい。

それを早速シルが指摘する。

「どうしたよ？お前らしくないな、まさか今の今まで今日のこと考えてなかったわけじゃないだろう？」

そういわれたラウルは眉をひそめながら困惑と苦笑いを浮かべる。

「いや、考えてたんだけど、この町の規模を考えると、考えがまとまらなかった」

ははは、と苦笑いするラウルは若干恥ずかしそうでもあった。

それが、現状をごまかすためのものなのか、自嘲なのかは分からないが・・・

しかし、そこでシルは一つの事実気付く。

（そうか、考えがまとまらなかったから、早い時間に集まったのか、俺も朝風呂で早起きすることが分かってたから、昨日はあっさり引いたんだな・・・）

それに気付くとラウルの頭が切れることがピックアップされて少し悔しいような気がするシルだったが、それに気付くこともまた、頭の回転が速いことだと、彼は気付いていない。

レイとアイリの二人はそんなところまで思考はめぐっておらず、シルと同じ状況になっても、おそらく気付くことは無かっただろう。

そしてラウルはそのままに誰も気付いていないと確信していた。

（なんか悔しいな、まあ、いいや。この借りは今晚返すぞ、ラウル・・・）

「どうした？シル」

シルが若干不敵な笑みを浮かべていた、もとい、にやけていたのに気付いたラウルが言う。

「いや、何でも無いけど、俺今日、一人で行動していいかな？」  
「は？」

ラウルは思わぬことを言われて困惑してしまう。  
彼は少し黙って、彼がひとりで行動したい理由を考えるが、まったく分からない。

「どうしてだ？」

とりあえず理由を本人に尋ねてみる。まあ、考えても分からないのだから、そうするよりほかに無いのだが。

「いや、ちよつとな」

しかし、返ってきた答えは要領を得ないものだったので、ラウルは若干眉をひそめて見せる。

「だめならいいんだ」

軽い口調で言っているが、これがラウルに対するダメ押しになる。

ここで『じゃあ駄目だ』なんて言われては元も子も無いように見えるが、ラウルが相手のときは、これで行ける事を彼は承知している。  
「一人でもいいけど、ちゃんと探してくれよ？」

思ったとおり、まさにその言葉がぴったりの状況になり、シルは少し満足そうだった。

「分かってるよ」

そういつて、アイリの方を見た。彼女は下を向いていて、表情はよく分からないが、それを見て、シルは少し表情を引き締める。

「・・・じゃあ、シルは別行動として、ほかは？何かある？」

この場合『ほか』というのはイコール、アイリとレイなわけだが、行きたい場所も、やりたいことも、特に無いと言う。まあ、遊びに来たわけではないので、何かあってもそれに要せる時間はあまり多くは無いのだが・・・

「うーん、適当に歩くのもなあ、とりあえず俺たちはハルクさんのところに行ってみようか」

レイからすぐに「そうね」と返事が来たので、その方向で決まりのようだ。



「さて、そうと決まれば、さっさと食事を済まして行くっか」  
「だな」  
シルはそう応えた。

数十分後、「やどや」のロビーにみんなは集まっていた。

「準備できたか？」

シルたち三人はほぼ同時にロビーに来たのだが、ラウルはだいぶ前から待つていたらしく、椅子に腰掛けて読書にふけていた。

そんなことをしていてもまったく違和感の無い優等生は分厚い本を脇に置いていた鞆の中に押し込み、立ち上がった。

「おう」

答えたのは、シルだった。

「おや？お出かけですか？」

ロビーにあるカウンターの奥からリックが出てくる。

「ああ、リックさん」

ラウルが振り向きながら言う。が、対象が小さすぎて一瞬相手を見失っていたのをシルは見ていた。

「どちらまで？」

「ええ、ハルクさんに会いに行くんですよ」

すると、リックの表情が一変した。突然変な汗をかき始める。

「へ、へえ〜ハルクにねえ〜へえ〜そうか〜」

明らかにおかしい言動、と、挙動。何かあるのだろうが、ここでは追求しておかないでおこう、おそらくハルクなら話してくれそうな気がする。

「マアイツテラッシャイナ」

不自然な言葉でそう続けると、彼は再び奥の方へと入って行ってしまった。

「なんだつたんだろう？」

四人の彼に対する疑問はさらに深まったのだった。

「とにかく行こうか」

「うん」

レイが返事をして、宿のドアを開ける。

外は朝の日差しに照らされていた。あちこちから挨拶の音が聞こえてくる。

巨大都市での、穏やかな日常風景がそこにはあった。

そして、そこで彼らはしばしの別れを続ける。

シルは三人が近くの角を曲がるまで見送ってから、歩を進めた。

さて、時は同刻、場所も同じエルゼイラ。

しかし、彼らとは別の目的で動く人間が居た。

ばん！と音を立てて乱暴に開くドア、そこには逆光で顔こそ見えな  
いが、二人の人影があった。

「なんだい、まだ営業時間じゃないよ」

店主だと思われる、深緑の前掛けをした男は熱心に丸テーブルを拭  
いていた。どうやらここは酒場らしい。

朝早くということもあって、店はまだ開店しておらず、当然客は居  
ない。

「まあ・・・そういわずに、あたしの話を聞いてくれよ」

その声で、ようやくその男はその人影が女性だということに気付く。  
女だからといって態度が変わるかどうかといえば・・・その人の人  
間性によるのだが・・・。

「なんだ？」

女はつかつかと軽快な足取りで男に迫っていく、男はその姿が鮮明  
に見えるようになるほど、表情を変えていく。

最初は機嫌の悪そうな表情、が、驚きに変わり、最終的には頬を染  
めていた。

赤い髪、黒いロングスカート、深く入れられたスリットから覗く白  
い脚。

そう、フレイヤもこの町に来ていたのだ。

男は少しの間フレイヤの姿をじろじろとにらんでいたが、それと同

時に、彼女の後ろから着いてくる人狼が視界に入った。

男は思わず後ずさって、テーブルで腰を打った。

それを見たフレイヤは軽く笑いながら、手を人狼の喉元に出し、咳くように言う。

「大丈夫だよ、とって食いやしないよ・・・犬みたいなもんさ」

そういつて、人狼の喉を手でわしわしと搔くように動かす。

「俺は犬じゃねえ！」

人狼はそう吠えるが、フレイヤはすかさず「黙ってな」といなした。「・・・なんのようだ？」

男もそろそろと警戒しながらも用件を聞いてきた。

フレイヤは口の端を若干吊り上げて笑った。まるで、いつかのシルのように。

しかし、容貌が冷淡なフレイヤの場合にはやけるといふ表現はあまりにも似つかわしくない。

冷笑、というのがしっくりくる表現だろう。

そして、フレイヤは口を開いた。

「人を探してるんだ、茶髪の男と・・・金髪の女、見たこと無いかい？<sup>よわい</sup>年齢十五、六だと思っただけだね」

「し、知らないな、見たこと無い、第一そんな年ならうちのような店にはこんだろう」

男は遠慮気味に言葉を押し出した。どうも後ろの人狼が気になって仕方ないという様子だ。

「それもそうだね」

彼女はさらりとそう言い返す。そして、顔を思い切り男の顔へ近づけ、耳元で咳く。

「ま、情報が入ったら教えてくれ・・・金ならあるからさ」

小さな声で咳きながら、襟元から手を入れ、金貨の入った小さな袋を取り出す。

「それとも、もっと違うものの方がいいかね・・・？」

彼女は膝を曲げ、太腿を大きく露出させる。

男が生唾を飲むのが分かった。

「また夕刻にここに来る。そのときに情報があれば、頼むよ?」

「あ……ああ、わかった」

その答えを聞くと、フレイヤは見せていた金貨を胸元に再び押し込み、「じゃ、いい情報を期待してるよ?」と念を押して、男と距離を取り、きびすを返した。

「行くよ、ウルフ」

「ああ」

そして二人は再び入り口から入り込んでくる光の中へと姿を消した。

話は再びラウルたちの方へと戻ってくる。

シルを除く三人は、予定通りハルクの元へと向かっていた。

昨日商人の男性と別れたあたりまでやってくる。

「えっと、どつちだっけ?」

レイが頭上に疑問符を浮かべながらくるとあたりを見回している。

「確かこつちじゃなかったか?」

ラウルが先を歩きながら、昨日ハルクが言っていた方へと進んでいく。

すると、すぐにそれらしい看板が見えてきた。

レンガ造りの家屋が立ち並ぶ通りにその看板はあった。

『エルゼイラ自警団屯所』と無味簡素な字で書かれていた。

とりあえず、その木製の扉をノックしてみる。

中からは女の人の声で「はいはい」と聞こえてきた。

ドアが開き、予想通り、声の主と思われる女性が出てきた、ラウルが一步前に歩み出て用件を伝える。

「えと、ハルクさんに話があるんです。お会いできませんか?」

その言葉に少しおどいたように目を見開いた女性だったが、それも一瞬の間だった。

「わかりました。こちらへどうぞ、あ、私はこの自警団屯所の案内役で、エスカって言うの、よろしくね」

「どうも、ラウルです」

会釈を交えつつラウルが言う。続いてレイも挨拶する。

「えと、レイです。こっちが、アイリ」

二人同時に頭を下げ、軽い挨拶を終え、奥へと案内する彼女の後に続く。

「ここよ」

エスカが立ち止まったのはごく普通な部屋の前。

「ちよっと待っててね」と言い残し、ノックの後、部屋に入っている。

少したつてから、彼女が出てきた。

「今客人が居るけど、よければ入って来いって」

彼女が親指で部屋を示しながら言ったので、お邪魔することにする。

「ありがとうございます」

ラウルの若干堅苦しくも感じる礼に、彼女は「いいっていいって」と、手を振って答えた。

彼女は元のロビーに戻り、三人が残された。

「お邪魔します」

「おう！よく来たな！」

ハルクは中の長テーブルに腰をかけていた。

あまり広いともいえない部屋の真ん中には長テーブルが置かれている。ハルクの前には背中を向けたまま座っている男性の姿が見える。どうやら客人とはこの人のことらしい。

「どうも・・・」

居心地悪げにそろそろと部屋に入ってくる三人をハルクは手招きする。

三人を招きいれたところで、あることに気付いたらしく、ハルクが眉をひそめる。

「シルはどうしたんだ？」

「今日はいっただけ別行動です」

ラウルがすかさず答える。その答えに「そうか」と腕組みしたまま答えたハルクは、とりあえず、自分の目の前に居る人物を紹介することにする。

「こいつはレウルつつてな、俺の同級生なんだ」

ラウルはちらりと黒髪はその男性を見やって、自己紹介をする。

「どうも、ラウルです」

相手は、軽い声で言う。

「おお！ラウルとレウル、似てますネ！」

につこりと無邪気な笑顔を見せる彼は、男のラウルが思うのもアレだが、何か惹かれるものがあると思った。

続く二人も、レイ、アイリの順で挨拶と紹介を済ませる。

「レイさんトアイリさんですネ、覚えましタ」

「少しこの辺と発音が違うんですね」

そう言ったのはアイリだった。

それにはラウルが答える。

「ああ、今でこそこのエルゼイラに住んではいるが、元々は極東の出身だからな、発音が異なるんだ」

なるほど、と、アイリたち三人が頷く。

「変ですか？」

「いえ、すごくいいと思います」

コンセプトだったのだから、少し不安そうな面持ちで尋ねてきた彼にアイリは笑顔を浮かべながら答える。

彼は少し照れながら頭を掻いた。

「こいつは極東の特殊な武術の使い手なんだ、よかったら教えてもらえばどうだ？」

「武術……」

ハルクの言葉にレイが反応して目の色を変えたように思ったが、今回の目的はいにくそれではない。

「いえ、ありがたい話ですけど、また今度にします」

「そうか」

残念だ、と言葉を続けたが、それほど残念そうには見えない。どちらでもよかつたのだろう。

それと、こちらの用事を優先してくれた、つまりはそういうことなのだろう。

「えと、人を探しているんですけど、なにぶん情報が無くて、どこから手をつけていいやら分からないので、何かアドバイスでもあれば、と思つてきたんですけど・・・」

ハルクは、なるほど、と数回頷いた。

「よし、家のところから何人が手伝いに出してもらおうよう、言ってみようか？」

答えは、否定だった。

といつても、やんわりといなすそうな、ずいぶん低いところからの物腰で、おずおずといった具合に。

そしてそれはアイリによるものだった。

「あ、いえ、私なんかのためにそこまでしていただかなくても結構です。そちらのお仕事もおありでしょうし、それに、先ほどラウル君が言ったとおり、情報もほとんどないので、探し方・・・といいますか、手がかりがありそうな場所を教えてくださいただけでかまわないです」

アイリは一息に言い切った。

その言葉に目を丸くしたのは、アイリと始めて対面したレウル以外の全員だった。

ラウルや、レイでさえ驚愕、といった表情をしている。

「あ、ああ、そうかい、なら東のほうかな、あの辺りは住宅街だし、情報も多いだろう、よそから来たならなおさらだな」

どうやらハルクもあせりを隠しきれていない。

この場の全員が、アイリのキャラクターを見失いかけていたのではないだろうか。



「ありがとうございます。東のほうですね？行ってみます」

お礼はラウルが言い、二人は会釈で済ませる。

「見つかるといいな」

ハルクは笑みを浮かべながら言う。

それに三人も同じように微笑みで答える。

「終わったら稽古つけてあげるヨ」

レウルの言葉に、レイが「その件は是非！」とかなりやる気を見せていて、ラウルは若干の苦笑を浮かべる。

「さて、じゃあ目的地も決まったことだし、そろそろ行こう、あまり長居しても迷惑だしね」

と、ハルクに苦笑いを投げかけ、部屋を後にする。ハルクからの挨拶も得に對したものはなかった、どの道、すぐに会うことになるだろうから、今は挨拶は必要ないだろう。

彼らが屯所から出るとき、一人の騎士と一人の魔術師とすれ違った。一人は銀の甲冑に身を包み、腰には剣を下げている。兜はかぶっておらず、ストレートの銀髪をなびかせている。堂々としたその様相は宮殿なんかにある、騎士の像を髣髴とさせる。

その後ろからは、魔術師だと思われる女性が着いてきている。気の弱そうな目に、長い茶髪、眼鏡をかけていて、茶色のローブで体を覆っている。

すれ違いざまに、その二人を見ていると、男性のほうはラウルたちを一瞥してさっさと行ってしまい、女性は、三人が通り過ぎるまでずっとこちらを見ていた。

そして彼らは、先ほどラウルたちが出てきた、ハルクの居る部屋へと向かう。

さて、そとに出てきた彼らはそれぞれに思うことを口に出していた。

「いや、アイリがあんなに喋るとは正直予想してなかったよ」

ラウルが先ほどのことを話している。その言葉に、レイも同意を示す。

「あたしも、まさかあんなに早口で捲くし立てるとは、どうしちゃったの？」

アイリは若干返答に戸惑う。

「え、いや、なんでもないとというか・・・あんまり迷惑をかけたくないんです」

「ふん」

素っ気無いレイのリアクション、その横でラウルは考えていた。何をかというと、時々感じる彼女への違和感。しかし、いくら考えてもその違和感の招待が分からず、ラウルは考えることを放棄した。それよりも、これからのことのほうが大事だ。

(たぶん気のせいだろう)

彼はそう思うことにした。

「さて、東だつたつけ？とりあえず行ってみるよな？」

ラウルのそれは質問というより、決定事項を確認しているという意味合いが強かった。

「うん、あたしはそれでいい、というか、それしかないと思うよ？」

レイの言葉にラウルが頷いて答え、三人は待ちの東側へと歩き始めた。

一方、こっちは一人で行動しているシルである。

彼は町の中央にある図書館に来ていた。

「は・・・なかなか無いもんだな、やっぱり情報が無さ過ぎるの

か・・・」

分厚い本をばさりと目の前のテーブルに投げ出しながらばやいてから、再び別の本を探しに行く。テーブルに投げ出された本の表紙に書いてあるのは、『派閥』という文字。

高くそびえる本棚の間を抜け、先ほど、本を取り出したあたりに戻ってくる。さつき本を抜いた部分がぼつかりと開いている。

突き当たりの棚から本をとろうと背伸びしたとき、隣に気配を感じ、そちらに視線を向ける。すると、一人の黒い髪を腰まで垂らした女性が、上のほうの本を取ろうとしているところだった。

その分厚い本は少しずつ出てきているが、両隣の本も同時にせり出してきていた。

しかし、女性にその本を戻すような余裕は無いらしい。

(椅子とか持つてくればいいのに)

そんなことを思いつつも、自分の本を後回しにして、女性のほうへと歩み寄る。

しかし、どうやら判断が遅かったらしい。「きゃっ」という短い悲鳴と同時に本がばさばさと床に散乱した。

「ああ」とはシルの心の中でつぶやいた言葉だが、思わず口に出しかけて、飲み込む。

「大丈夫ですか？」

と、ありきたりな言葉を投げかけながら、尻餅をついている彼女に手を差し伸べる・・・が、次の瞬間、シルは本能的に一步後ずさっていた。

そこに居たのは、人間ではなかったのだ、否、性格には、『半分人間』。

長いローブに包まれて見えていなかったのだが、その女性は、上半身が人間で、下半身が、大蛇のように鱗に覆われ、うねっていた。シルの表情が変わったのを見て、彼女も顔がさっと青ざめる、そして。

「お願い、叫ばないで！」

小声で、だが、力強く言った彼女は、シルの口を両手で押さえて、後ろに押し倒した。

とっさのことに、シルも反応できずに、背中から倒れる。さらに彼女は続ける。

「お願い・・・私のこと、誰にも言わないで・・・！」

その表情は必死としか言いようの無いものだった。目を潤ませ、震える声で呟く彼女に、二、三度首を縦に振って、手を離させた。

「・・・君は・・・」

シルは改めて彼女の体を上から下まで見る。どう見ても、腰から上は人、以下は蛇にしか見えない。

彼女は困惑の表情を浮かべながら、「来て」と小さく呟いた。

それに黙って頷き、二人は図書館の奥へと入っていく。

「あ、あの、さっきはごめんなさい、つい気が動転してしまっ・・・」

手をもじもじと動かしながら彼女が謝罪する。

「いや、いいよ、別に」

女性に押し倒されるのは嫌じゃないし、とは言わないでおいた。

「えっと、私、シエスっていいいます」

「ああ、シルです」

お互いに軽く会釈をして自己紹介を済ませる。

「えと、あなたはラミアって知ってますか？」

彼女はいろんな方向に視線を泳がせながら質問する。

「ああ、たしか、半身半蛇の・・・」

続くいい言葉が無く、シルはそこで言葉を切った。それでも、彼女は小さく頷く。

「はい、そうです。私もそうなのです。えっと、幻界の亜人で・・・はぐれなんです」

最後の一文に表情を曇らせる。

よくあることなのだ、召還されたはいいが、捨てられたり、召還主

が死んだりして、はぐれになってしまい、幻界に帰る方法も無いという者が。

おそらく彼女もそうなのだろう。

「なるほど、でもどうして人に知られたくないんだ？」

彼女はさらに表情を曇らせながらも、ぽつりぽつりと答えてくれた。

「・・・私はもともと、もっと南に居たのですが・・・この半身のせいで酷い扱いを受けて、姿を隠してここまで逃げてきたんです。

本当なら、一人で部屋に籠ってじっとしていればいいのでしょうか。蛇は知識を司る生き物ですから、ついこの場所に足を運んでしまつのです。もし正体がばれてしまったら、私はこの町にも居られなくなってしまうかもしれません」

悪い質問だったか、と、後悔するシルだったが、彼女の言葉の中に、一つ気になる言葉があった。

「その・・・悪かったな、嫌なこと言わせちゃって、大丈夫だ、誰にも言わないよ」

「いえ・・・ありがとうございます・・・」  
彼女は何度か左右に首を振る。同時に彼女の長い黒髪が、何度か波を打つ。

「知識を司るって言ってたよな？」

彼女は思わぬ方向に話が転んで首を傾げる。

「はい、蛇は知識の象徴なのです」

「じゃあさ、黒の派閥について何か知らないか？」

「・・・黒の派閥は十七年ほど前、とある事件が原因で、四罰（紅、銀、黒、蒼の四つの派閥の総称）から破門されました」  
彼女は淡々と話しながら、テーブルに資料となりそうな本をどさりと置く、三分の一ほどはシルが持ってきた。

シルは黙って話を聞いている。

「その事件というのが、魔法でも、召還術でもない、儀式です」

「儀式？」

聞きなれない単語だった。意味は知っているが、どんなものなのか、まったく見当もつかない。

「そうです。彼らは既存の召還術を改良・・・いえ、この場合は改悪と言った方が適当かもしれませんね。召還に生贄を組み合わせることによつて、新たな生命を生み出そうとしたのです。キメラや、ホムンクルスというそれです」

「・・・そんなことをしていたのか、でもどうしてそんなことを？ テーブルの、シエスの前に座つて頬杖を付きながら些細な疑問を投げかける。

「・・・力を欲していたそうです」

「力？」

「はい、力です。それも、喧嘩で勝てるような、といったような、ちやちなものではありません、世界をひっくり返すことができるほどの強大な力です」

どうして力が必要なのか、誰でもその疑問に行き着くだろう。そして、シルもそうだった。そして彼はその疑問をそのまま出した。それに対する彼女の返答は真剣なものだった。

「おそらく・・・これはあくまで私のよそですが・・・」

彼女が声を潜め、顔を近づけてきたので、シルもそれに従う。

「おそらく、戦争ではないかと」

やっぱりか、と、シルは思う。それ以外にじっくりくる理由は思いつかない。

「南のアルニ工帝国が最近戦争に向けて大きく動くところとしています。きっともうすぐ動くでしょう、私はこれに、黒の派閥が噛んでいるのではないかと疑っているのです」

依然声を潜め、顔を近づけたままで、話は進む。

「どうしていまさら、黒の派閥は破門されて、解体されたんじゃないのか？」

シルの質問を聞き、彼女は周りの様子を少し気にしてから、言葉を発する。

「私もそう思っていました。しかし、大きな組織ですから、残党が今まで力を蓄えていたとしてもおかしくは無いはずです。それに、あなたの言っていた、黒いローブの集団、黒の派閥の人間で間違いないと思います」

どうしてそう思う？とシルが聞く。あの集団が黒の派閥ではないかとはシルも思っていて、この質問なのだが、これは自分の意見を他の意見と照らし合わせてみたいという意思からだ。

「ここ数年で新しい派閥や、公式な団体が結成された可能性は極めて低いです。派閥なら大々的に報告されますし、隠す必要もありません、非公式の団体という線も薄いです。あ、これは黒の派閥で無いとしたら、という話ですよ？」

と、シエスは補足する。

「黒の派閥の事件以来、そういう組織が力を持つたりすることに、他の派閥や、国が敏感になっていますから。監視も厳しくなっていますから。そして、他の国の勢力ということも無いと思います。わざわざ国境を侵して、さらにはそのような騒動を起こして国際問題になっても、相手には何の利得もないですから。以下のことから、その魔導師は黒の派閥の物ではないかと、それとも一つ。そのアイリという女性、見たこと無いので分かりませんが、その人には確実に何か秘密があると思います」

最後の一言に、やっぱりそうなのか、と息を漏らす。

そして、それと同時に彼女の思考の深さに感服する。シルよりかなり論理的に、現実的に考えている。

さらに、自分の考えも、彼女と大体合致することを確認した。

このときこの予想が、確信へと変わった。相手が真つ当な精神を持っている団体なら、この予想は的中していただろう・・・結果的にこの予想は完全ではなかったのだ・・・。

「ありがとうな、助かったよ」

図書館の玄関口でシルがシエスに言う。

「いえ、私もたくさんお話できて楽しかったです」

彼女はそれに笑顔を持って答えた。

ずいぶん話をしていたらしく、もうすっかり昼になっていた。

図書館を出て初めて自分が空腹になっていることに気付き、彼はとりあえず腹ごしらえをする為に商店街のほうへと歩いた。

商店街に着くと、ばったりとラウルたちに遭遇した。

都合のいい展開もあったもんだと、シルは心の中で苦笑する。もちろん、表には欠片も出さないが。

「よう、捗ってるか？」

そういうシルの手にはパンが握られていた。

ちなみにそのパンは、食パンにハムやレタスなどの野菜を載せて二つ折りにしたものだ。

「うまそうだな」

ラウルは表情こそ変えていないが、皮肉だとすぐに分かる。

いい気なものだな、と、そういいたいのだろう。

「晩飯はご馳走らしいから、今は安物で我慢してるのさ」

その返事にラウルは苦笑する。店に失礼だ、とでも言いたげな表情である。

「とりあえず、俺たちは今から町の東側に行くんだけど、シルの用事はいいのか？」

それはイコール、用事は済んだのか、ということだ、シルは黙って頷き。彼らに同行する。

図書館での収穫があれば、十分すぎるほどに十分だった。

（ただ、気になる情報も付いてきたけどな・・・）

と、黙ってアイリのほうに視線を向ける。何のことも無く歩いている彼女だが、改めてそう思っで見ると、なにやら不思議な感じがする。おそらく気のせいなのだろうが。

凝視しているとアイリが視線に気付いたのか、こちらを見てきて視



線が合ったので、目をそらす。

それをレイが怪訝な視線で見してきたが、それからもさらに目をそらした。

（まあ、アイリにどんな秘密があっても、関係ないな）

今はそう思うことで、自分を納得させることにした。

しばらく歩いてみると、町の東に入った。風景からは豪華な石造りの建物はすっかり消え、木造の家がほとんどになってきた。商店街ほど華やかでもなく、人の通りも少なくなってきた。

少し先には、エルゼイラの町の東門が見えている。

宿屋や、商店の数が減り、畑が多く見えるようになってきたので、ハルクが言っていたのはこのあたりでほぼ間違いないだろう。

とりあえず、すれ違う人に心当たりが無いか聞いてみる。

「あの、すみません、ちょっといいですか？」

前から歩いてきた、タオルを肩から下げるおじさんに声をかけて見る、もう片方の肩にかけている鍬を見ると、どうやら農夫らしい。

「このあたりで、カルア地域から引越してきた人とか居ませんか？」

尋ねたのはラウルだ、男性は四人を見回して少し考えるように首を傾げる。

「いやー、よく分からんね、他を当たってくれ」

数秒後、帰ってきた返事に、意気を少し落としながらも、男性にはお礼と別れを告げ、言われたとおり、他を当たることにする。

この感触だと、探すのは相当骨が折れそうだ。そう思って眉をしかめずには居られないラウルだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5294u/>

---

魔法のシルシ

2011年11月16日15時19分発行